

國學院大學學術情報リポジトリ

企画展・トークイベント記録

伊豆半島・諸島における神社の成立と展開：

祭祀考古学研究と校史資料活用の現場から：

國學院大學伝統文化リサーチセンター企画展報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002012

企画展・トークイベント記録

伊豆半島・諸島における
神社の成立と展開

—祭祀考古学研究と校史資料活用の現場から—

2011

例 言

1. 本書は、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター（センター長：杉山林継）の「祭祀遺跡にみるモノと心」プロジェクト（責任担当者：吉田恵二）が主体となり、「神社祭礼に見るモノと心」プロジェクト（責任担当者：茂木貞純）、「國學院の学術資産に見るモノと心」プロジェクト（責任担当者：武田秀章）と共同で開催した平成22（2010）年度第1回企画展『伊豆半島・諸島における神社の成立と展開—祭祀考古学研究と校史資料活用の現場から—』の記録である。
2. 本企画展は、國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館にて、平成22（2010）年5月16日から7月10日まで開催した。
3. 本企画展は、内川隆志（当センター准教授）、深澤太郎（当センター助教）、石井匠（当センターPD研究員）が担当し、企画の立案と遂行に当たっては、杉山林継・吉田恵二・青木豊・小川直之・笹生衛（当センター教授）、齊藤智朗（当センター准教授）、加瀬直弥（当センター講師）、中村耕作（当センター助手）の指導・協力を得た。また、映像展示『伊豆の祭礼行事と祭祀遺跡』は、吉田・内川が監修し、深澤が脚本、加藤元康（当センターPD研究員）が編集の任に当たった。
4. 企画展の関連事業であるトークイベント『伊豆の祭祀遺跡と神・仏』は、当センター資料館メディアウォール前にて、平成22（2010）年6月23日の18時から20時半にかけて開催した。パネリストは、三橋健（本学大学院客員教授）、笹生衛、内川隆志、深澤太郎、中村耕作の5名であり、深澤が司会を担当した。コメントは、吉田恵二、俵寛司（サイバー大学助教）による。
5. 本書の執筆者については、それぞれ担当箇所の末尾に文責を示した。映像展示『伊豆の祭礼行事と祭祀遺跡』のコンテに示した画像は、加藤元康の手による。
6. 本企画展の開催に当たっては、白濱神社、熱海市教育委員会、下田市教育委員会、大島町教育委員会、利島村教育委員会、三宅村教育委員会、原嘉孝氏（白濱神社宮司）、外岡龍二氏（下田市文化財保護審議会副会長）、藤井建彦氏（下田市社会教育指導員）、増山順一郎氏（下田市教育委員会）、栗木崇氏（熱海市教育委員会・当センター共同研究員）、岩崎薫氏（大島町教育委員会）、小島広美氏（利島村教育委員会）、野田幸徳氏（三宅村教育委員会）、大工原豊氏（安中市教育委員会）、原政一氏（郷土史研究家）より、多大な御厚意を賜った（順不同）。ここに記して、深甚なる謝意を表すると共に、記載漏れの方々には御海容を乞う次第である。
7. 展示・トークイベント等の実施に際しては、本学研究開発推進機構事務課・財務部管財課、眞田芳彰氏・上西亘氏・浪形早季子氏（当センター資料館嘱託学芸員）、乾剛夫氏・黒沢龍生氏・長泉勝生氏（社団法人渋谷区シルバー人材センター）、土屋健作氏（女子美術大学非常勤講師）、伊藤慎二氏（本学助教）、下湯直樹氏（本学助手）、加藤里美氏（当センター講師）、阿部昭典氏（当センター客員研究員）田中大輔氏（名古屋経済大学市邨高等学校教諭・当センター共同研究員）、齋藤しおり氏・新原佑典氏・鈴木聡子氏・筒井裕氏（当センターPD研究員）、宮川博司氏（当センターリサーチアシスタント）、杉山章子氏（当センター作業協力者）、塩谷風季氏（当センター元作業協力者）、朝倉一貴氏・江戸邦之氏・楠恵美子氏・佐藤周平氏・田島太良氏・平野哲也氏・廣木健太郎氏・山口晃氏（本学大学院文学研究科）、蔵野泰洋氏（本学文学部卒業生）の御協力を得た（順不同）。ここに記して、篤い御厚意に感謝申し上げたい。
8. 本書は、内川隆志監修の下、深澤太郎・石井匠が編集した。

目 次

例 言

第1章	企画展の概要……………	(内川隆志・深澤太郎・石井匠)	171
第2章	展示……………	(内川隆志・深澤太郎・中村耕作・石井匠・加藤元康)	172
第3章	トークイベント『伊豆の祭祀遺跡と神・仏』 ……………	(三橋健・笹生衛・内川隆志・深澤太郎・中村耕作+吉田恵二・俵寛司)	191

挿図目次

第1図	伝統文化リサーチセンターの研究フロー	172	第15図	伊豆半島・伊豆諸島と海上交通・流通…	179
第2図	展示構成図……………	173	第16図	白濱神社境内遺跡出土の和鏡と儀鏡……	180
第3図	大場メモの残る下田周辺図……………	174	第17図	白濱神社境内経塚の礫石経……………	180
第4図	多賀神社の御神木の前で……………	175	第18図	洋上より三宅島と物見処遺跡を望む……	180
第5図	三倉山の日没……………	175	第19図	物見処遺跡1号積石遺構……………	180
第6図	網代港より宮脇遺跡と向山を望む……	176	第20図	物見処遺跡6号積石遺構……………	180
第7図	遺物出土状況……………	177	第21図	発掘調査状況……………	180
第8図	三原山の御神火 昭和61年11月……………	177	第22図	洋上より八丈小島を望む……………	181
第9図	洋上より利島を望む……………	178	第23図	鳥打遺跡遠望……………	181
第10図	阿豆佐和気命神社……………	178	第24図	鳥打遺跡近景……………	181
第11図	阿豆佐和気命神社境内遺跡 石造小祠…	178	第25図	小祠に納められた柄鏡……………	181
第12図	阿豆佐和気命神社境内遺跡 鏡出土状況	178	第26図	利島の四手……………	182
第13図	堂山神社境内遺跡 遺構・遺物出土状況	178	第27図	展示状況……………	183
第14図	明治7～9年『伊豆国付利島全図』……	178	第28図	伊豆半島・諸島の主要祭祀遺跡……………	184

挿図目次

展示品目録1……………	185	映像展示 コンテ1……………	188
展示品目録2……………	186	映像展示 コンテ2……………	189
展示品目録3……………	187	映像展示 コンテ2……………	190

第1章 企画展の概要

企画展の開催に至る経過

当センターでは、校史・学術資産の研究（第Ⅲグループ）を背景に、伝統文化の形成に関する研究（第Ⅰグループ）と、伝統文化の研究（第Ⅱグループ）を推進しており、その成果を広く公開する事業として、企画展・特別展を開催している。特に、特別展が計画されていない平成22（2010）年度は、企画展の充実による成果の発信に努めることとなり、研究グループ毎、もしくはグループ共同で複数回の展示を開催することが予定された。

このような経過の中で、第Ⅰグループでは、伊豆地域・出雲地域・東北地域をフィールドとする各研究班が、それぞれの立場から企画展を行うこととした。そのうち出雲班は、10月に今年度の研究フォーラムを計画しており、展示と連携した事業の推進が望まれた。また、東北班は、11月に発掘を含む調査を企画しており、成果公開の充実を期すためには、年末以降に展示を開催するのが順当と考えられた。一方、伊豆は、本学が古くから考古学的研究のフィールドとしてきた地域であったため、当センターの調査研究に関連する資料も、学術資料館や考古学研究室が所蔵、受託、ないしは一時保管しているものが多い。また、東京都利島村の阿豆佐和気命神社境内遺跡から出土した和鏡については、今夏中の返却が予定されており、都区内で展示する当面最後の機会を設けるとすれば、早期の企画展開催が望まれたのである。

そこで、今年度初めの企画展は、各グループによる個別の研究成果と、3グループの事業を有機的に関連させる研究フローを活用しつつ、祭祀考古学の方法論と現状について、伊豆班の具体的研究事例を基軸に展観することとした。具体的には、第Ⅰグループが主体となって展示構成案の作成と関係事務を行い、神道考古学の形成に関する研究成果の提示を第Ⅲグループが担当した。また、伊豆の神社祭礼に関する研究については、第Ⅱグループの助言を得た。

（内川・深澤・石井）

企画展の経過

企画展の計画については、既に平成21（2009）年度より進めており、同年12月末に展示案の決定を見た。これに従って、平成22年4月までに、関係機関との連絡・交渉や、平常展に陳列中の資料を除く展示品の整理、展示パネル案・題箋案・展示資料目録案の作成などを行った。その内、パネルについては、新たな規格の作成が計画されたため、様式は平常展のパネル類に準拠することとした。但し、企画展では、平常展とは異なり導線が逆時計廻りとなるため、パネルの縦帯シンボルカラーを向かって右に配するなど、若干の変更を加えている。

具体的な展示作業は、5月7日から開始し、伝統文化リサーチセンターの構成員のみならず、学術資料館・考古学研究室や、多数の大学院生・学部生の協力を得て進められた。しかし、題箋等の規格統一に係る試行錯誤があり、最終的にはオープンキャンパス当日でもある5月16日の開館直前まで作業が続いた。7月10日に至る49日間の会期中には、3,177名の観覧者があった。また、関連行事として企画したトークイベント『伊豆の祭祀遺跡と神・仏』については、初動が遅れたため、ようやく5月13日にパネリストの都合が整い、6月23日の実施が決まった。これは、展示室のメディアウォール前をイベント会場とする、初めてのイブニングミュージアムであり、水曜日の夜にも関わらず、一般来聴者52名・学内関係者23名の参加があった。

以上の経過で、当企画展は無事会期を終了したが、残念ながら図録・パンフレット等を作成する予算措置は講じられていなかった。そこで、展示したパネルの内容と、配布した展示資料目録、及び映像展示『伊豆の祭礼行事と祭祀遺跡』のコンテを再録すると共に、トークイベント『伊豆の祭祀遺跡と神・仏』の討論内容を掲載して、当企画展の記録としたい。

（内川・深澤・石井）

第2章 展示

ごあいさつ

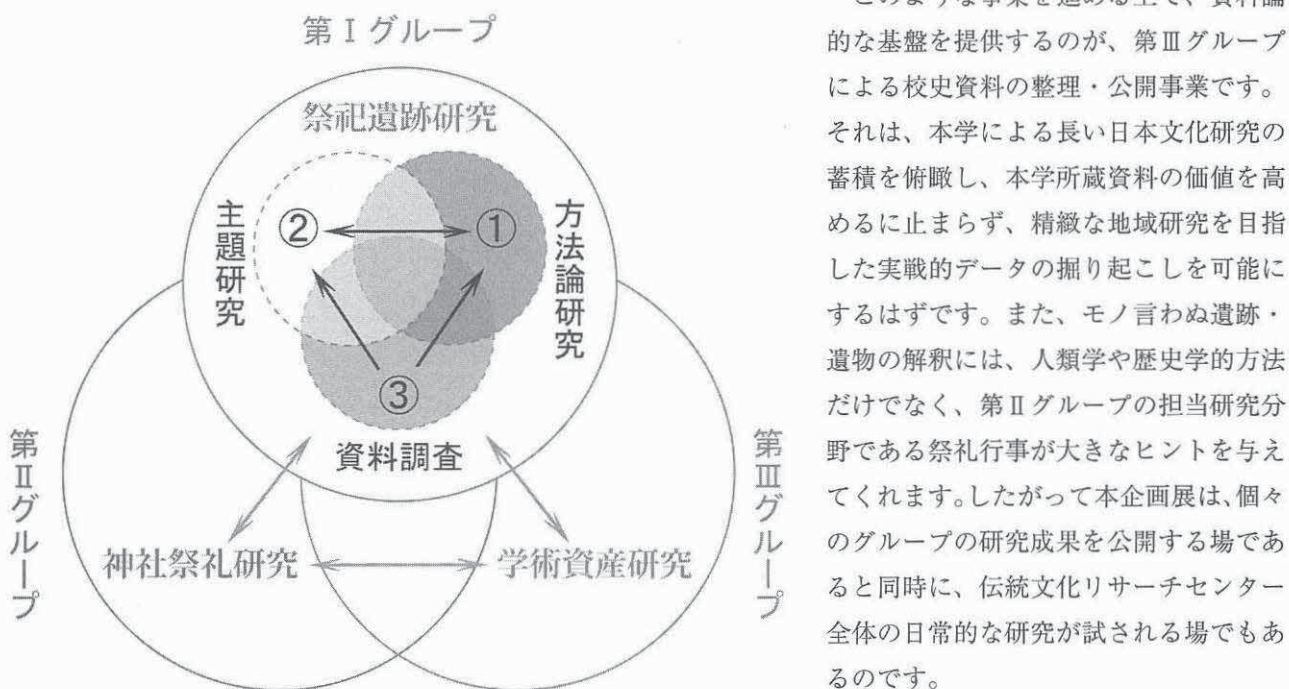
文部科学省の採択を受けた私立大学学術研究高度化推進事業（オープン・リサーチ・センター整備事業）によって、國學院大學伝統文化リサーチセンターが、『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』事業を開始したのは平成19年のことです。以来、わたしたちは広く研究者を受け入れ、本学所蔵の学術資産を活かしつつ、日本の風土や文化が育んだ伝統の知恵と、その社会的意義を問うために研究・公開活動を推進して参りました。既にご案内の通り、当センターでは祭祀遺跡研究・神社祭礼研究・学術資産研究を展開し、その成果については、紀要・報告書をはじめとする刊行物や、WEB等を通して公開しております。しかし、「伝統の知恵と実践」を理解するために何より力を発揮するのは、実際の「モノ」にはかなりません。したがって、伝統文化リサーチセンター資料館で開催する企画展こそ、当センターの公開事業の中で、最も重要な活動の一つと考えております。ご来場の皆さまには、モノを通して、日本人の生活や信仰の姿をご覧ください。是非、お時間の許す限り、ゆっくりとご観覧下さい。また、本企画展の開催にあたってご協力下さった皆様や、関係の諸機関に御礼申し上げますとともに、なお一層のご支援、ご協力を頂ければ幸いに存じます。

國學院大學伝統文化リサーチセンター センター長 杉山林継

研究のコンセプト

平成19年度選定の文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』は、生活の中で形作られた「モノ」と「心」の関係を紐解き、日本の伝統文化に認められる特質を把握しようとする試みです。具体的には、伝統文化リサーチセンターに3つの研究プロジェクトを設け、第Ⅰグループの祭祀遺跡研究、第Ⅱグループの神社祭礼研究、そして第Ⅲグループの学術資産研究を3本の柱として研究を進めています。

中でも第Ⅰグループは、マツリ背景にある人間の思考を読み解く①方法論研究を主な課題の一つに据えました。その上で、日本列島における祭祀・儀礼の特質や、神道の成立・展開過程を追求するために、東北・伊豆・出雲の各地域を主たるフィールドとして新しい研究法を実践する②主題研究や、研究の前提となる祭祀遺跡・祭祀遺物の③資料調査を実施しています。



第1図 伝統文化リサーチセンターの研究フロー

このような事業を進める上で、資料論的な基盤を提供するのが、第Ⅲグループによる校史資料の整理・公開事業です。それは、本学による長い日本文化研究の蓄積を俯瞰し、本学所蔵資料の価値を高めるに止まらず、精緻な地域研究を目指した実戦的データの掘り起こしを可能にするはずです。また、モノ言わぬ遺跡・遺物の解釈には、人類学や歴史学的方法だけでなく、第Ⅱグループの担当研究分野である祭礼行事が大きなヒントを与えてくれます。したがって本企画展は、個々のグループの研究成果を公開する場であると同時に、伝統文化リサーチセンター全体の日常的な研究が試される場でもあるのです。

はじめに

神社は、いつ、いかにして成立し、どのような変容を遂げて今日に至ったのでしょうか。この問題は、日本宗教史の上でも極めて大きな研究課題とされてきました。もっとも、その前提として「神社」とは何か、という根本的な問題が控えており、そもそも神社や社殿のあり方も、列島各地で一様ではなかったに違いありません。

そこで今回の企画展では、令制神祇祭祀の整備期である7世紀後半から8世紀初頭を定点として、いかにして古墳時代の祭祀空間と祭祀具が神祇祭祀へ収斂し、いかにして今日に至るまでの地域的な変容を遂げたのか、というテーマを設定しました。フィールドに選んだ地域は、伊豆半島・伊豆諸島、すなわち旧伊豆国域です。この地域は、かねてから國學院大學の考古学分野や神道学分野が研究フィールドの一つとしてきた空間であり、神道考古学を提唱した大場磐雄博士以来、着実に研究や資料の蓄積を重ねてきました。本企画展の趣旨に沿ったケーススタディを実践する場として伊豆を選んだ背景には、このような研究史的事情も関係しているのです。かかる目的と前提の下に、本企画展では、次のような展示構成を計画しています。

第Ⅰ章 大場資料に見る祭祀遺跡研究の足跡

第Ⅲグループが整理・公開を進めている大場磐雄博士資料を活用して、関連考古資料の価値を高める道筋を探ります。

第Ⅱ章 祭祀遺跡と古社の連続・不連続

古墳時代の祭祀遺跡のマツリから神社祭祀へ連続する事例と、連続しない事例の差異はどこにあるのでしょうか。

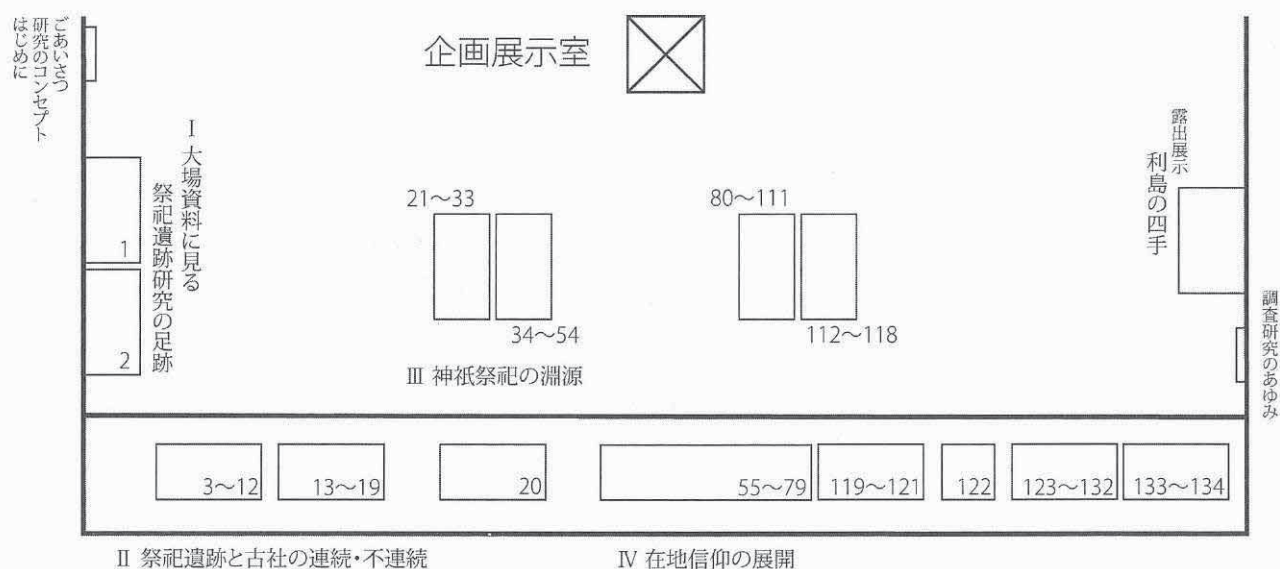
第Ⅲ章 神祇祭祀の淵源

5世紀代における古墳の副葬品セットは、祭祀遺物のモチーフに反映されたり、令制神祇祭祀の幣帛に受け継がれます。いずれも、リアルタイムで伊豆半島・諸島の祭祀遺跡に波及しました。

第Ⅳ章 在地信仰の展開

古代三嶋神の信仰は、中世・近世を通じて在地的な三嶋大明神のマツリに変容していきます。とりわけ、伊豆諸島では積石和鏡を特徴とする祭祀が盛んになり今日に至りました。

ここでは、以上の流れで、考古資料から描き出される神社信仰の展開過程や、関連遺跡をとりまく景観についてご覧頂きます。なお、本企画展の開催にあたっては、多くの方々からご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。次第です。



第2図 展示構成図

I. 大場資料にみる祭祀遺跡研究の足跡

Traces of Ritual Site Study in Oba Collection

祭祀考古学の母胎である神道考古学を唱導した大場磐雄博士は、無類の整理魔であり、収集した資料を体系的に保存・管理していた。したがって、当センターが整理・目録化を進めてきた大場資料は、大場学を検証するだけでなく、現代的な地域史研究資料、考古学研究資料として十分な価値を保っている。

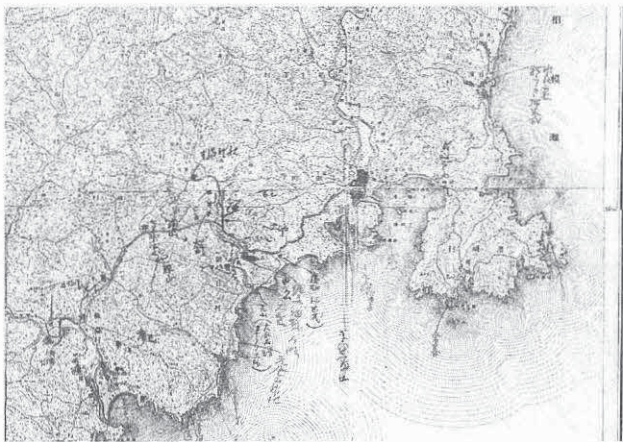
特に、発掘調査では現場で記録された情報以外は手元に残らないが、大場資料にはこれまで公になっていなかったり、不鮮明な写真しか知られていなかったりする現場状況のデータが数多く保存されている。これらの資料を、実際の考古資料と突き合わせていくことで、古い調査成果を再生・活用することが可能になるだろう。

ここでは、静岡県下田市吉佐美洗田遺跡と、熱海市上多賀宮脇遺跡関係の記録から、神道考古学萌芽期・成熟期における考古学的調査の姿を振り返ってみたい。(中村)

大場磐雄と研究資料

大場磐雄(1899-1975)は、國學院大學で鳥居龍藏に人類学・考古学、折口信夫に民俗学、内務省神社局で宮地直一から神道史学を学び、「考古・文献・民俗三位一体の神道研究」と言われる「神道考古学」を提唱した。また、長野県平出遺跡・静岡県登呂遺跡・茨城県常陸鏡塚古墳など、多くの遺跡で調査を指揮し、國學院大學の考古学の基礎を作り上げた。

メモ魔・整理魔であった大場は、各地の詳細な記録を残しており、特に大規模な発掘調査の少なかった戦前においては、見聞した全ての考古資料を記録している。調査地に赴く際には、地形図に行程や神社・古墳などの分布、所見などを書き込み、遺跡に着くとその状況を撮影した。付近で採集された資料の保管者を訪ね、メモ・実



第3図 大場メモの残る下田周辺図

測・拓本・写真の形で記録に残し、これらの資料をもとに調査日誌もつけている。個々の資料は、遺跡や種類ごとにまとめて保管した。これらは、既に失われた資料も含んでおり、大変貴重な記録である。

さらに、これらをもとに論文を著し、一部は著書に収録された。それ以前に、講演や授業などの形で成果が公表されることもあるが、講義案・草稿なども多く残されており、研究プロセスを辿ることが可能である。

大場は「神道考古学」に代表されるように、資料の解釈においては民俗学や神道学の成果を援用することが多いが、その基盤はオーソドックスで着実な考古学資料の収集にあった。(中村)

伊豆の祭祀遺跡と「神道考古学」

青年時代の大場は、縄文時代の土偶や石棒を西欧の宗教学・民族学の理論で解釈する研究を行っていた。その代表的な研究の一つが昭和2(1927)年の河津町見高段間遺跡の資料調査報告である。ところが、この調査の前後に、いつも通り周辺の遺跡・採集遺物を見て回る中で、洗田遺跡出土の模造品と出会ったのだ。すぐに現地を確認した大場は、夕陽に照らされた美しい三倉山に心を打たれ、祭祀遺跡の研究を志すことになる。

その後、全国の祭祀遺跡を比較した大場は、山・石・樹・岬といった特徴的な自然景観と祭祀遺跡の立地との深い関係に気づき「神奈備型」・「立石型」などに類型化していく。三倉山と洗田遺跡の関係は、神奈備型の代表例として位置づけられていった。また、大場は白濱神社の社史編纂にも携わるが、その過程で火山島の神々を祭る伊豆独特の祭祀に注目し、祭祀遺跡の類型に「三島型」を加えている。

昭和33(1958)年に発掘調査が行われた多賀神社境内の宮脇遺跡からは、大石の下から鏡を含む祭祀遺物が出

土した。境内には神木の樫があり、神社の背後に神奈備型の向山が聳え、一方で参道は浜辺まで伸びている。ここには大場の「神道考古学」が重視した山・石・樹・海という4大要素が集結しているのである。

後の祭祀遺跡研究は、祭りの場・道具の研究、日常と非日常の関係、歴史的な文脈での位置づけなど、様々な発展してきた。大場の研究を象徴する洗田遺跡・宮脇遺跡も、そうした視点から再検討することが必要であり、彼が残した詳細な記録はその大きな手がかりとなる。

(中村)



第4図 多賀神社の御神木の前で

Ⅱ. 祭祀遺跡と古社の連続・不連続

Continuity and Discontinuity of Ritual Sites and Old Shinto Shrines

古墳時代には、東北北部と南西諸島を除く日本列島全域に、前方後円墳をはじめとする定型的な墳墓が営まれた。つまり、この時代に、ある程度共通する死生観・靈魂観が、列島規模で共有されるようになったのである。じつさい祭祀遺跡の中には、現代の神社まで継続して信仰の対象とされている事例もある。例えば、4世紀後半から国家的な祭祀遺跡が営まれた福岡県宗像沖ノ島遺跡には、今も宗像大社沖津宮が祀られている。ヤマト王権の中核に当たる奈良県の三輪山麓一帯は、大物主神を祀る大神神社の境内地である。伊豆・伊豆諸島は、式内社が多いことでも知られているが、式内社に比定される神社の一部には、古墳時代以来のマツリの間を受け継いでいる事例がある。祭祀遺跡から神社に至る連続・不連続の岐路を解き明かすためには、祭祀遺跡や神社の信仰を担った地域社会の動向について新たな考古学的知見を加え、仔細な検討を行っていく必要があるだろう。

(深澤)

洗田遺跡 静岡県下田市吉佐美 古墳時代／5世紀～6世紀

大加茂川東岸の舌状台地上に位置する洗田遺跡から真西を望むと、神奈備型の三倉山を拝することができる。暦を持たなかった古墳時代の人々は、三倉山の山頂に沈む春分・秋分（3月・9月下旬）前後の夕陽に、自然暦としての役割を期待していた可能性もあるだろう。調査者の大場磐雄が神道考古学の提唱に至った前提には、既にランドスケープ的視点が含まれていたのである。

遺跡の営まれた台地上からは、珠文鏡、小型素文鏡、鉄製品のほか、須恵器、手捏土器、土製の鏡・勾玉・丸玉、石製の勾玉・剣・白玉・有孔円板などが出土した。鏡・鉄製品などの財や、様々な財を象った模造品類で、三倉山に降り坐す神霊を歓待する行為は、5世紀から盛んになった奈良県三輪山麓における祭祀と共通したものだ。今なお高塚古墳が発見されていない伊豆半島南部にも、令制神祇祭祀に連なる新しいマツリが及んでいたのである。しかし、古代になると加茂郡の中核は青野川流域に移動したようであり、洗田遺跡の祭祀が古代の神社に受け継がれることはなかった。

(深澤)



第5図 三倉山の日没

宮脇遺跡 静岡県熱海市上多賀 古墳時代・古代／5世紀～9世紀

縄文時代から古代にかけての複合遺跡である宮脇遺跡は、大川西岸の多賀神社境内に所在し、東に戸又の海岸を望む。背後には神奈備型の向山が控えるが、遺跡の北に位置することから自然暦との関わりは想定しにくい。神社の祭神は、海から来訪したと伝えられており、むしろ沖に浮かぶ初島などを意識して遺跡が営まれた可能性もあるだろう。立春の前後の2月上旬には、初島付近から日の出を仰ぐことができ、逆に初島側から宮脇遺跡方面を望むと、ランドマークとなる向山を越えて、遥か富士山まで見通すことができる。

多賀神社自体は、近世に近江の多賀神社を勧請したものとされるが、文政9（1826）年の『境内地相図』よれば、

本殿の裏に地主神が祀られていたことがわかる。

発掘調査では、地主神付近の玉石上に高さ40cm程度の岩が据えられており、その岩の下から六獣鏡1面、儀鏡3面が出土した。また、櫓の御神木周辺では、土師器・須恵器とともに鉄製鋏先残片1点、儀鏡2面が見つっている。境内からは、このほかにも石製模造品をはじめ、古墳時代前期から古代の土師器・須恵器などが出土した。遺物の年代は、6世紀～7世紀をピークとしており、早くから宮脇遺跡が当地域における継続的な祭祀の場とされてきたことは疑いない。これは、多賀神社を式内社の白浪之彌奈阿和命神社に比定する有力な根拠でもある。（深澤）



第6図 網代港より宮脇遺跡と向山を望む

Ⅲ. 神祇祭祀の淵源

Source of Shinto Rituals

神社神道が現在の姿になるまでには、当然のように紆余曲折があった。しかし、その母胎である神祇祭祀が形成されたのは古墳時代のある段階であったことは疑いない。最近の研究では、5世紀代に整備された古墳の副葬品セットが、令制神祇祭祀で用いられた幣帛の原型になったと考えられている。伊豆半島南部から伊豆諸島にかけては、今のところ高塚古墳の発見例が認められていない。しかし、既に見た通り、古墳の副葬品と共通した財や、それらの模造品を持つ祭祀遺跡は伊豆地域でも知られている。また、令制神祇祭祀の法的な整備が進められていた7世紀後半には、伊豆大島と泉浜遺跡C地点の地で国家的な祭祀が行われていた。また、式根島の吹之江遺跡でも、続く奈良時代の祭祀跡が見つかっており、政府の伊豆に対する関心の高さが窺える。（深澤）

〔参考資料〕 姉崎二子塚古墳 千葉県市原市 古墳時代／5世紀

後の令制神祇祭祀で用いられた幣帛の原型は、5世紀代に形成された古墳の副葬品にある。もっとも、伊豆半島南部から伊豆諸島にかけては、横穴墓や洞穴墓は見られるものの、今のところ高塚古墳の確実な築造例は認められていない。そこで参考資料として、比較的豊富な副葬品のセット関係が見られる房総半島の姉崎二子塚古墳を取りあげたい。二子塚古墳は、養老川下流域の姉崎古墳群に属する前方後円墳であり、古墳群中最大の墳丘長約114mを誇る。墳丘は3段築成で、円筒埴輪列を持つ。戦中に攪乱を受け、昭和22（1947）年に大場磐雄が発掘調査を実施した。埋葬施設は、後円部と前方部に存在するが、いずれのものも棺・槨等は持たなかったようであり、木棺直葬の可能性が高い。後円部の副葬品は、鏡3面・勾玉8点・滑石製管玉4点・琥珀製棗玉5点・瑠璃小玉300余点のほか、直刀・鉄鉾などの鉄製武器や、甲冑残片・金銅金具片といった武具、そして石製模造品である。前方部の副葬品は、直刀2振、銀製腰佩2連、瑪瑙勾玉1点が出土した。また、発掘調査以前に、石枕1点、鉄鉾2点、鉄鋌百数十本や、甲冑片、轡が出土した。

これらの品々を含む古墳の副葬品は、いずれも当時の貴重な財であり、玄界灘に浮かぶ宗像沖ノ島遺跡などで確認された神々への供献品とも組成が近似している。もちろん、その組成にはバリエーションがあり、常房地域に分布が集中する石枕など、地域的な特徴も認められた。(深澤)

和泉浜遺跡C地点 東京都大島町泉浜 飛鳥時代／7世紀～8世紀

「イツミハマ」の名に相応しく、北西に伊豆半島や富士山を望む和泉浜遺跡C地点は、数度にわたって東京都教育委員会と國學院大學が調査した。海浜部に点在する5箇所の遺物集中地点を中心に祭祀遺跡が形成されており、令制神祇祭祀の整備期における具体的な考古事例として貴重である。

出土遺物の主体を占める須恵器は、蓋杯・杯・高杯・長頸瓶・甕などが認められ、概ね7世紀中葉から8世紀初頭の時間幅に収まった。土師器は、畿内からの搬入品である6世紀～7世紀の蓋杯・杯・碗・高盤・広口短頸壺・甕などが出土した。他に、勾玉5点、丸玉33点、紡錘車1点の石製模造品と、ガラス小玉29点が見られる。金属製品としては、金鋌・銀鋌、銅製六鈴釧・鈴、鉄製武器(直刀・刀子・鎌・矛・剣)などが発見された。祭祀に使われた器物の多くは、畿内や湖西地域から搬入されたものが主体を占めており、組成は前代以来の古墳副葬品と共通する点も少なからず認められる。また、ほぼ一時期の短い期間で祭祀行為が終結している点も注目されよう。

ちなみに、当時の伊豆諸島に関する文献記録としては、天武12(684)年の「伊豆島」噴火を示唆する記述や、同時期に起こった白鳳の大地震、あるいは文武2(699)年の役小角配流記事などが『日本書紀』・『続日本紀』に見られ、本遺跡を取り巻く同時代的な地域事情がうかがわれる。(内川)



第7図 遺物出土状況



第8図 三原山の御神火 昭和61年11月(岩崎薫氏提供)

IV. 在地信仰の展開

Development of Local Beliefs

古代には、三嶋神をはじめとする伊豆の神々へ神階が奉授されるなど、当地に対する朝廷の関心は高かったらしい。一方、中世になると伊豆諸島を中心に、積石塚と和鏡を用いたマツリが盛んになる。もっとも、三島大社の旧社地と伝わる下田市白濱神社境内でも、野外で和鏡や儀鏡を奉ったり、礫石経塚を営んだりしており、少なくとも伊豆半島南部と諸島の間では、共通した祭祀行為が行われていたと見てよい。

15世紀半ばまでに成立していたと見られる『三嶋大明神縁起』(『三宅記』)は、薬師如来を本地とする大明神の伊豆諸島創造、大蛇退治、大明神の垂迹と三宅島壬生氏の由来を語っている。そこには、恐らく考古資料に現れたような、実際の在地信仰が反映されているに違いない。(深澤)

阿豆佐和気命神社境内遺跡 東京都利島村 中世・近世／12世紀～18世紀

集落が形成された島北部の緩傾面に所在する阿豆佐和気命神社境内遺跡は、神社拝殿左側から中世陶器片が見つかった事を契機に認識され、國學院大學が調査を実施した。

遺構の時期は、大きくⅢ期に分けられる。その内、Ⅰ期に相当する最下部では、12世紀後半に遡る板石・玉石で構築された約9m×約2m、高さ約0.5m～約0.9mの石壇と、板石で構築された石祠5基を確認した。そこからは、陶器・炆器・磁器・和鏡・双孔儀鏡・銭貨・刀子・釘・鎌などが出土しており、とりわけ和鏡は10面を数える。陶器や炆器類は、常滑・渥美の壺・甕・鉢が多く、いずれも膨大な点数に及ぶ。続くⅡ期は、石造小祠が埋没した状況を呈し、遺構は基壇状をなす。13～17世紀を中心とした常滑・瀬戸・美濃・肥前製品などが混在し、それらの年代的ピークは15世紀にあたる。Ⅲ期は、基壇状の石が埋没した上に玉石が敷き詰められた段階で、15



第9図 洋上より利島を望む



第10図 阿豆佐和気命神社



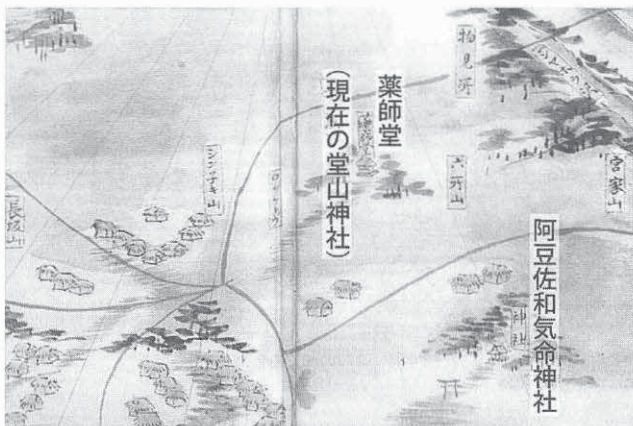
第11図 阿豆佐和気命神社境内遺跡 石造小祠



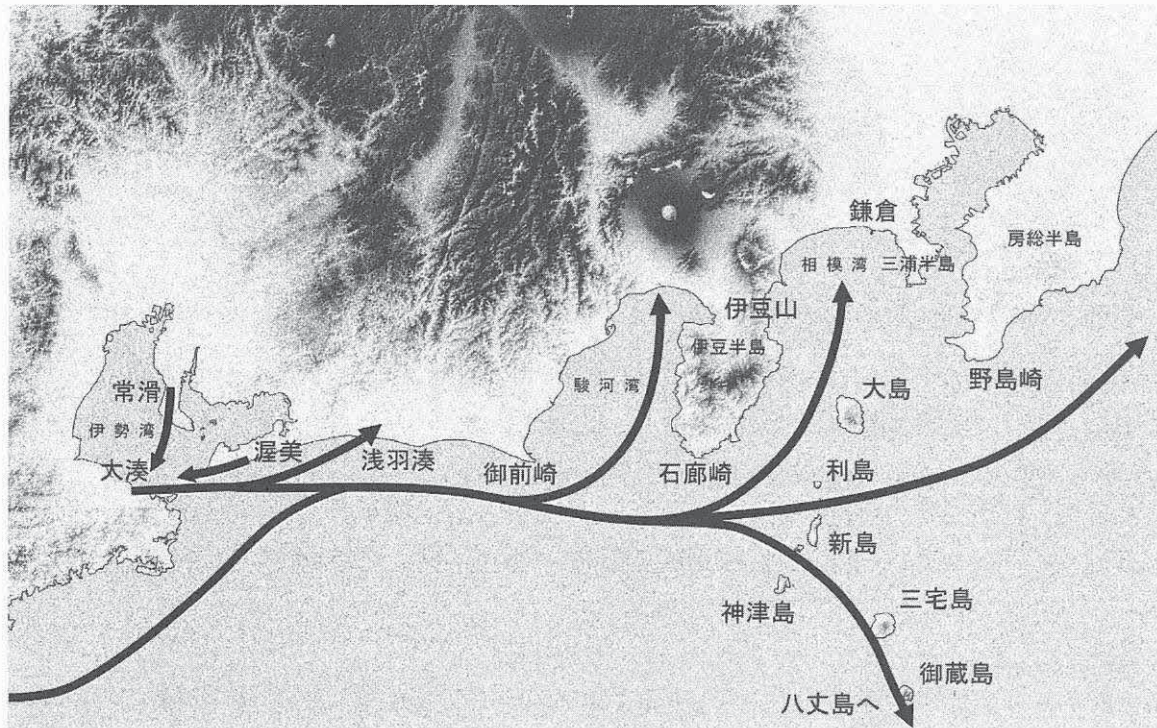
第12図 阿豆佐和気命神社境内遺跡 鏡出土状況



第13図 堂山神社境内遺跡 遺構・遺物出土状況



第14図 明治7～9年『伊豆国付利島全図』(『利島村史』)



第15図 伊豆半島・伊豆諸島と海上交通・流通

世紀～18世紀の常滑・瀬戸・美濃・肥前製品と共に、一ヶ所に集められた形で時代を異にする21面もの和鏡が発見された。

明治初年まで預大明神と称された当神社は、式内社の阿豆佐和気命神社に比定されており、利島では三嶋大明神の御子神を祀る古社とされる。出土した考古資料が物語るように、神社の成立と展開や、祭祀の継続性を検討する事例としても極めて貴重な遺跡である。
(内川)

堂ノ山神社境内遺跡 東京都利島村 中世・近世／12世紀～18世紀

阿豆佐和気命神社の北に位置する堂ノ山神社境内では、社殿を改築した際に17面の和鏡が出土し、村道拡幅工事によっても鏡が発見された。これら、平安時代から室町時代を中心とする時期に収まる和鏡の存在を受け、平成4（1992）年から國學院大學が発掘調査を実施したところ、複数の集石に伴って陶磁器・銅製品・鉄製品が出土した。陶磁器の様相から見ると、常滑・渥美や瀬戸の甕・片口鉢などが主体となる12世紀～13世紀、常滑・瀬戸のほかに龍泉窯の製品なども見られる15世紀～16世紀、そして肥前や瀬戸美濃系の磁器が現れる16世紀末～19世紀に至る。銅製品は、5面の和鏡以外に、双孔儀鏡、目貫金具、筭、銭貨が出土した。また、鉄製火打ち鎌・和釘・刀子・鎌・双孔儀鏡も見つかった。このような状況は、阿豆佐和気命神社境内遺跡と極めて類似する。

堂山神社は、明治年間の神社合祀によって成立した社であり、本来この地には薬師堂が存在した。伊豆諸島では、三嶋大明神と島々の御子神を祀る神社が、その本地仏である薬師如来を祀る堂とセットで営まれる例が多く、恐らく利島でも阿豆佐和気命神社と薬師堂が対の関係にあったようである。

15世紀後半までに成立したと見られる『三嶋大明神縁起』（『三宅記』）では、利島について触れることは少ないものの、同書に先行する考古学的事実が、伊豆諸島における中世的信仰の原型を物語っている。
(深澤)

三嶋神を祀る神社の境内遺跡

三嶋神を祀る神社は、三嶋大社、下田の白濱神社、三宅島の富賀神社などが、それぞれ本宮であると唱えている。考古学的に見れば、富賀神社裏の富賀浜遺跡で奈良三彩、白濱神社境内の火達山遺跡で平安時代の祭祀用土器、三嶋大社境内遺跡で中世のかわらけが発見されており、いずれも古くから奉られていたことは疑いない。



第16図 白濱神社境内遺跡出土の和鏡と儀鏡



第17図 白濱神社境内経塚の礫石経

その内、白濱神社の裏山から江戸時代に出土した和鏡を仔細に観察してみると、鏡面に他の鏡が重なっていた痕跡が認められた。これは、複数の鏡類が共に長らく露天状態にあった事実を示すものである。鏡類は、利島の阿豆佐和気命神社・堂ノ山神社の境内遺跡からも数多く出土しており、中世の白濱神社境内と、伊豆諸島の神社・薬師堂などでは、マツリの方法が共通していた可能性が指摘できる。(第16図では、水草双鳥鏡と儀鏡が重なっているように図示しているが、儀鏡ではなく柳樹双雀鏡の可能性があると補記しておく。)(深澤)

物見処遺跡 東京都三宅村伊豆 中世・近世／15世紀～16世紀

物見処遺跡は、北部伊豆諸島を越えて、時に伊豆半島や富士山まで見通すことのできる海沿いの崖上に位置する積石遺構群である。昭和56(1981)年以来、本学が三宅島で実施する考古学実習の一環として発掘調査した。

遺跡を構成する5基の大型積石遺構は、平面的には何れも隅丸方形形状を呈し、外周には周溝を伴う。積石には墨書礫を含むことから、単なる積石塚ではなく、礫石経塚としての機能も果たしていたようである。遺構の規模は、必ずしも一定ではないものの、周溝を除く積石部だけでも一辺約5m～約6mを誇る。礫石経塚としては全国的にみても大型の部類に属し、むしろ形態の上では中世の塚墓に近い。中世以降の三宅島では、島内各所に積



第18図 洋上より三宅島と物見処遺跡を望む



第19図 物見処遺跡1号積石遺構



第20図 物見処遺跡6号積石遺構



第21図 発掘調査状況

石塚が営まれており、和鏡を伴う事例も認められる。その一部は、信仰の対象として大切に現在まで守られてきた。一方、物見処遺跡は、遺構の状況や出土資料などから判断すると、16世紀中頃までには廃絶していた可能性が高い。

残念ながら、これらの遺構を構築した契機については、直接的な物証や伝えが残されていない。しかし、物見処の地は「キサイ山」・「大崎宮」・「向浦」・「向倉」などとも呼ばれ、式内社である伊賀牟比賣命神社に比定される后神社の旧社地附近にあたるという。(深澤)

鳥打遺跡・宇津木遺跡 東京都八丈町八丈小島 近世・現代／17世紀～20世紀

八丈小島の北西端にある鳥打遺跡と、南東端にある宇津木遺跡は、ともに海岸部に立地する祭祀遺構群である。平成3(1991)年に本学が調査し、17世紀初頭から昭和44(1969)年の離島まで継続した神への信仰の痕跡が確認された。

大きな岩塊の周囲に大小様々な立石、石囲い、石造小祠が営まれ、小祠からは御神躰の柄鏡が多数発見されている。更に、近現代のガラス鏡も検出されていることからほぼ400年に亘って「鏡」を御神体、あるいは神への奉獻品とした祭祀行為が連綿と続けられていたことが実証された。17世紀前半の伊万里製品も多量に出土しており、該期の商品流通を考える上で重要である。

なお、各戸が奉祭する神々は、すべて巫女の託宣によって外から持ち込まれたもので、その祭神は、大神宮様・金山様・木玉様・淡島様・ウブノ様・新宮様・渡り様(渡海様)・弁天様・金毘羅様・諏訪様・天神様・三島様・貴宮様・秋葉様・竜宮様・八幡様・大天狗様・沖の明神・浜の明神・エトリ様・天の次郎様・風の三郎様などである。巫女は、ミコケ(巫女気)のある女子に祭文や行軌を教えこみ、多くは母子間で世襲されたようである。このような神役は、琉球・南西諸島におけるノロ・ユタなどと同質であり、神役の継承過程や神のよりつき、社会における役割など様々な点で類似する。(内川)



第22図 洋上より八丈小島を望む



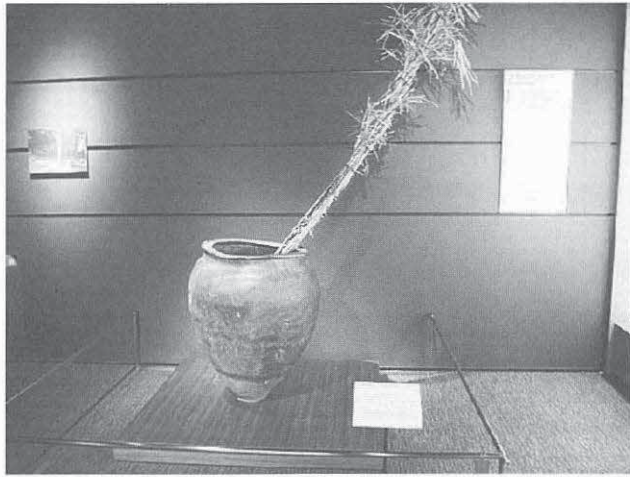
第23図 鳥打遺跡遠望



第24図 鳥打遺跡近景



第25図 小祠に納められた柄鏡



第26図 利島の四手（イメージ）

〔露出展示〕伊豆諸島 利島の四手（シデ）

阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡では、中世の大甕が45個体と極めて多く検出されている。これは、飲料水や作物への水の供給を天水に頼った貯水のための道具であり、それを神に奉獻しているのである。貯水施設の整った今も、畑の一隅には甕が据えられ、立木に降り注ぐ雨の滴を、立て掛けた竹や縄を伝って効率的に溜める「四手」と呼ばれる工夫がみられる。四手の語源は、注連縄に垂らす紙垂に相通じるものであり、天からの授かりものである一滴の水をも大切にすることが、生活の知恵として今も息づいている。（内川）

調査研究のあゆみ

- 昭和2（1927）年度 静岡県下田市洗田遺跡踏査（大場磐雄）
- 昭和12（1937）年度 静岡県下田市洗田遺跡発掘調査（佐藤民雄・江藤千萬樹・長田實・壬生忠臣）
- 昭和12（1937）年度 静岡県下田市夷子島遺跡発掘調査（佐藤民雄・長田實）
- 昭和13（1938）年度 静岡県下田市洗田遺跡発掘調査（大場磐雄・佐藤民雄・豊元國）
- 昭和18（1948）年度 静岡県下田市白濱神社『伊古奈比咩命神社』編纂（大場磐雄）
- 昭和33（1958）年度 静岡県熱海市上多賀神社境内宮脇遺跡発掘調査（多賀郷土誌研究会・沼津女子高等学校 指導：大場磐雄・小野真一）
- ◎昭和56（1981）年 東京都三宅村中郷遺跡発掘調査（國學院大學考古学研究室 担当：吉田恵二）
- ◎昭和57（1982）年～平成20（2008）年 東京都三宅村物見処遺跡発掘調査（國學院大學考古学研究室 担当：吉田恵二）
- ◎昭和63（1988）年度 東京都新島本村御所穴洞窟遺跡（國學院大學考古学資料館御所穴洞窟遺跡・帆縫原遺跡 学術調査団 団長：加藤有次）
- ◎平成3（1991）年度～平成4（1992）年度 文部省科学研究費補助金 総合研究A「海洋信仰の考古学的研究」（研究代表者：永峯光一）による國學院大學海洋信仰研究会を設置
- ◎平成3（1991）年度～平成4（1992）年度 文部省科学研究費補助金 総合研究A「海洋信仰の考古学的研究」による伊豆諸島出土・伝世和鏡所在調査（永峯光一・青木豊ほか）
- ◎平成3（1991）年度 東京都八丈町鳥打遺跡・宇津木遺跡発掘調査（國學院大學海洋信仰研究会鳥打遺跡・宇津木遺跡調査団 団長：永峯光一）
- ◎平成3（1991）年度 東京都八丈町鳥打遺跡・宇津木遺跡発掘調査（國學院大學海洋信仰研究会鳥打遺跡・宇津木遺跡調査団 団長：永峯光一）
- ◎平成4（1992）年度～平成5（1993）年度 東京都利島村堂ノ山神社境内遺跡発掘調査（國學院大學海洋信仰研究会堂ノ山神社境内遺跡学術調査団 団長：永峯光一）
- ◎平成5（1993）年度 東京都御蔵島村神ノ尾遺跡発掘調査（國學院大學海洋信仰研究会神ノ尾遺跡学術調査団 団長：青木豊）
- ◎平成5（1993）年度～平成7（1995）年度 東京都大島町和泉浜遺跡C地点発掘調査（國學院大學考古学資料館和泉浜遺跡C地点学術調査団 団長：永峯光一）
- ◎平成9（1997）年度 東京都利島村八幡神社境内遺跡発掘調査（國學院大學考古学資料館八幡神社境内祭祀遺跡学術調査団 団長：青木豊）

- ◎平成10（1998）年度～平成15（2003）年度 東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡発掘調査（國學院大學海洋信仰研究会阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡発掘調査団 団長：青木豊）
- 平成11（1999）年度～平成17（2005）年度 文部科学省学術フロンティア事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」による大場磐雄写真資料整理調査（國學院大學日本文化研究所 運営委員長：杉山林継）
- ◎平成13（2001）年度～平成14（2002）年度 物見処遺跡発掘調査関連伊豆諸島資料調査（國學院大學考古学研究室 担当：吉田恵二）
- 平成15（2003）年度～平成18（2006）年度 物見処遺跡発掘調査関連伊豆半島資料調査（國學院大學考古学研究室 担当：吉田恵二）
- 平成15（2003）年度～平成17（2005）年度 静岡県熱海市伊豆山神社境内遺跡発掘調査（國學院大學考古学資料館伊豆山経塚遺跡学術調査団 団長：藤本強）
- ◎平成19（2007）年度～ 文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」による大場磐雄資料整理調査（國學院大學伝統文化リサーチセンター第3G）
- 平成19（2007）年度～ 文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」による伊豆半島祭祀遺跡・祭祀遺物調査（國學院大學伝統文化リサーチセンター第1G）
- ◎平成20（2008）年度～ 文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」による東京都八丈町積石信仰関連遺跡踏査（國學院大學伝統文化リサーチセンター第1G）
- ◎平成21（2009）年度～ 文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」による東京都三宅村積石信仰関連遺跡踏査（國學院大學伝統文化リサーチセンター第1G）
- 平成21（2009）年度 文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」による静岡県下田市白濱神社所蔵資料調査（國學院大學伝統文化リサーチセンター第1G）

●：伊豆半島調査

◎：伊豆諸島調査



第27図 展示状況



第28図 伊豆半島・諸島の主要祭祀遺跡

文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」
 國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館

企画展「伊豆半島・諸島における神社の成立と展開―祭祀考古学研究と校史資料活用の現場から―」

企画展示室 平成22（2010）年5月16日（日）～7月10日（土）

■大場資料にみる祭祀遺跡研究の足跡

No.	指定	作品名称	作者・出土・伝来	員数	世紀	所蔵者
1	—	洗田遺跡関連資料	大場肇雄	9点	20世紀	本学蔵
2	—	宮脇遺跡関連資料	大場肇雄	8点	20世紀	本学蔵

■祭祀遺跡と古社の連続・不連続

No.	指定	作品名称	作者・出土・伝来	員数	世紀	所蔵者
3	—	滑石製勾玉	静岡県下田市洗田遺跡出土	2点	5～6世紀	本学蔵
4	—	勾玉形石製品	静岡県下田市洗田遺跡出土	2点	5～6世紀	本学蔵
5	—	剣形石製品	静岡県下田市洗田遺跡出土	1点	5～6世紀	本学蔵
6	—	有孔円板形石製品	静岡県下田市洗田遺跡出土	2点	5～6世紀	本学蔵
7	—	鉄製品残欠	静岡県下田市洗田遺跡出土	2点	5～6世紀	本学蔵
8	—	小型素文鏡	静岡県下田市洗田遺跡出土	1点	5～6世紀	本学蔵
9	—	鏡形土製模造品	静岡県下田市洗田遺跡出土	7点	5～6世紀	本学蔵
10	—	高杯形土製品	静岡県下田市洗田遺跡出土	4点	5～6世紀	本学蔵
11	—	丸玉形土製品	静岡県下田市洗田遺跡出土	4点	5～6世紀	本学蔵
12	—	勾玉形土製品	静岡県下田市洗田遺跡出土	8点	5～6世紀	本学蔵
13	—	土師質土器	静岡県熱海市上多賀宮脇遺跡	1点	9世紀	熱海市教育委員会蔵
14	—	儀鏡	静岡県熱海市上多賀宮脇遺跡	2面	8～9世紀	熱海市教育委員会蔵
15	—	変形六獣鏡	静岡県熱海市上多賀宮脇遺跡	1面	5～6世紀	熱海市教育委員会蔵
16	—	儀鏡	静岡県熱海市上多賀宮脇遺跡	3面	8～9世紀	熱海市教育委員会蔵
17	—	鉄製鍬先残片	静岡県熱海市上多賀宮脇遺跡	1点	5～6世紀	熱海市教育委員会蔵
18	—	有孔円板形石製模造品	静岡県熱海市上多賀宮脇遺跡	2点	5～6世紀	熱海市教育委員会蔵
19	—	瑪瑙製勾玉（参考出品）	静岡県熱海市上多賀向畑	2点	6世紀	熱海市教育委員会蔵

■神祇祭祀の淵源

No.	指定	作品名称	作者・出土・伝来	員数	世紀	所蔵者
20	重文	石枕	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	1点	5世紀	本学蔵
21	—	鉄鏃	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	8点	5世紀	本学蔵
22	—	四魭鏡	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	1点	5世紀	本学蔵
23	—	勾玉文鏡	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	1点	5世紀	本学蔵
24	—	鏡片	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	1点	5世紀	本学蔵
25	—	琥珀玉	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	4点	5世紀	本学蔵
26	—	硬玉製勾玉	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	3点	5世紀	本学蔵
27	—	管玉形石製模造品	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	4点	5世紀	本学蔵
28	—	有孔円板形石製模造品	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	2点	5世紀	本学蔵
29	—	立花	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	1点	5世紀	本学蔵
30	—	石製模造品残片	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	1点	5世紀	本学蔵
31	—	剣形石製模造品	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	5点	5世紀	本学蔵
32	—	銅製垂耳飾	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	1対	5世紀	本学蔵
33	—	ガラス小玉	千葉県市原市姉崎二子塚古墳出土 史学会寄贈	1連	5世紀	本学蔵
34	—	紡錘車形石製模造品	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
35	—	丸玉	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1連	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
36	—	ガラス小玉	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	12点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
37	—	勾玉	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	5点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
38	—	金鉾	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	2点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
39	—	銀鉾	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	2点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
40	—	鉄矛	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
41	—	鉄鏃	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	4点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
42	—	刀子	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
43	—	鐙	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
44	—	銅	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
45	—	銅鈴	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
46	—	銅釧	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1点	6～7世紀	大島町教育委員会蔵
47	—	杯	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
48	—	杯	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	3点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵

展示品目録2

49	—	高盛	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
50	—	短頸壺	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
51	—	蓋杯	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	3点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
52	—	高杯	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	3点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
53	—	短頸壺	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	1点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵
54	—	長頸壺	東京都大島町和泉浜遺跡C地点	2点	7世紀後半	大島町教育委員会蔵

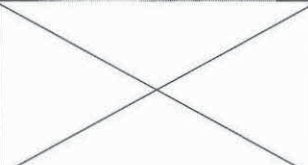
■在地信仰の展開

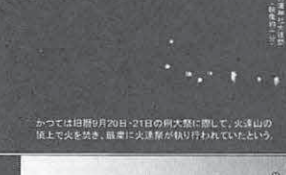
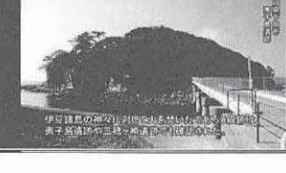
No.	指定	作品名称	作者・出土・伝来	員数	世紀	所蔵者
55	—	大甕（渥美）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	12世紀後半	利島村教育委員会蔵
56	—	三筋甕（渥美）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	12世紀後半	利島村教育委員会蔵
57	—	甕（常滑）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	13世紀前半	利島村教育委員会蔵
58	—	甕（常滑）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	13世紀後半	利島村教育委員会蔵
59	—	片口鉢（常滑）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	12世紀後半	利島村教育委員会蔵
60	—	片口鉢（常滑）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	14世紀	利島村教育委員会蔵
61	—	片口鉢（瀬戸）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	14世紀	利島村教育委員会蔵
62	—	片口鉢（常滑）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	3点	15世紀	利島村教育委員会蔵
63	—	広口壺（常滑）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	13世紀後半	利島村教育委員会蔵
64	—	甕（常滑）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	15世紀後半	利島村教育委員会蔵
65	—	壺（常滑）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	2点	16世紀前半	利島村教育委員会蔵
66	—	壺（常滑）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	16世紀前半	利島村教育委員会蔵
67	—	壺（常滑）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	2点	16世紀前半	利島村教育委員会蔵
68	—	甕（志登呂）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	16世紀後半	利島村教育委員会蔵
69	—	鉄釉狛犬（瀬戸）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	15世紀前半	利島村教育委員会蔵
70	—	灰釉碗（瀬戸）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	15世紀	利島村教育委員会蔵
71	—	双耳小壺（美濃）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	16世紀後半	利島村教育委員会蔵
72	—	水注（美濃）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	16世紀後半	利島村教育委員会蔵
73	—	鉄釉碗（瀬戸）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	16世紀後半	利島村教育委員会蔵
74	—	水注（美濃）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	16世紀後半	利島村教育委員会蔵
75	—	水注（美濃）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	16世紀後半	利島村教育委員会蔵
76	—	灰釉瓶（瀬戸）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	17世紀前半	利島村教育委員会蔵
77	—	鉄釉瓶（美濃）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	17世紀中頃	利島村教育委員会蔵
78	—	染付草文小瓶（肥前）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	5点	17世紀前半	利島村教育委員会蔵
79	—	染付網目文瓶（肥前）	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	17世紀前半	利島村教育委員会蔵
80	—	儀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	12世紀後半	利島村教育委員会蔵
81	—	山吹散双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	12世紀前半～中頃	利島村教育委員会蔵
82	—	草紋鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	12世紀後半	利島村教育委員会蔵
83	—	菊花散双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	12世紀後半	利島村教育委員会蔵
84	—	桧垣秋草双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	12世紀後半	利島村教育委員会蔵
85	—	秋草野兎蝶鳥鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	12世紀後半	利島村教育委員会蔵
86	—	菊花双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	13世紀初頭	利島村教育委員会蔵
87	—	州浜秋草双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	13世紀前半	利島村教育委員会蔵
88	—	秋草双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	13世紀中頃	利島村教育委員会蔵
89	—	浮線棧紋散蝶鳥鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	12世紀後半	利島村教育委員会蔵
90	—	菊花散双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	14世紀前半	利島村教育委員会蔵
91	—	蓬萊鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀中頃	利島村教育委員会蔵
92	—	網代紋双鳥鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	12世紀前半	利島村教育委員会蔵
93	—	山吹散双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	12世紀後半	利島村教育委員会蔵
94	—	菊枝蝶鳥鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	13世紀前半	利島村教育委員会蔵
95	—	流水紋鴛鴦鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	13世紀中頃	利島村教育委員会蔵
96	—	梅花浮線稜文散双鶴鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	14世紀前半	利島村教育委員会蔵
97	—	菊花散双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	14世紀中頃	利島村教育委員会蔵
98	—	三盛亀甲紋散双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	14世紀中頃	利島村教育委員会蔵
99	—	蓬萊鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀前半	利島村教育委員会蔵
100	—	松樹散双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀前半	利島村教育委員会蔵
101	—	菊花散双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀前半	利島村教育委員会蔵
102	—	菊花散双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀前半	利島村教育委員会蔵
103	—	千鳥双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀前半	利島村教育委員会蔵
104	—	鳥居双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀中頃	利島村教育委員会蔵
105	—	菊花蔓地文双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀前半	利島村教育委員会蔵
106	—	菊花散双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀中頃～後半	利島村教育委員会蔵
107	—	蓬萊鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀中頃～後半	利島村教育委員会蔵

展示品目録3

108	—	亀甲地文双雀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀	利島村教育委員会蔵
109	—	牡丹双鳳鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	15世紀後半～16世紀前半	利島村教育委員会蔵
110	—	蓬萊鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	16世紀中頃～後半	利島村教育委員会蔵
111	—	五階松柄鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1面	17世紀初頭	利島村教育委員会蔵
112	—	双孔儀鏡	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	9点	12世紀後半	利島村教育委員会蔵
113	—	刀子	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	8点	19～20世紀	利島村教育委員会蔵
114	—	斧	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	2点	15～17世紀	利島村教育委員会蔵
115	—	小柄	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	16～18世紀	利島村教育委員会蔵
116	—	懷刀	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	17～18世紀	利島村教育委員会蔵
117	—	鱗口	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	1点	17～18世紀	利島村教育委員会蔵
118	—	仏飯具	東京都利島村阿豆佐和気命神社境内遺跡	3点	16世紀中葉～17世紀初頭	利島村教育委員会蔵
119	—	陶片（常滑）	東京都利島村堂ノ山神社境内遺跡	2点	13世紀前半	利島村教育委員会蔵
120	—	陶片（常滑）	東京都利島村堂ノ山神社境内遺跡	1点	15世紀前半	利島村教育委員会蔵
121	—	陶片（常滑）	東京都利島村堂ノ山神社境内遺跡	1点	16世紀前半	利島村教育委員会蔵
122	—	礎石經一括	東京都三宅村物見処遺跡	—	15～16世紀	三宅村教育委員会蔵
123	—	四耳壺（丹波）	東京都八丈町宇津木遺跡	1点	17世紀	八丈町教育委員会蔵
124	—	広口壺（常滑）	東京都八丈町宇津木遺跡	1点	13世紀後半	八丈町教育委員会蔵
125	—	壺（常滑）	東京都八丈町宇津木遺跡	1点	14世紀後半	八丈町教育委員会蔵
126	—	色絵大皿（肥前）	東京都八丈町宇津木遺跡	1点	17世紀後半	八丈町教育委員会蔵
127	—	赤絵瓶	東京都八丈町宇津木遺跡	1点	17世紀中頃・後半	八丈町教育委員会蔵
128	—	赤絵鳳凰文瓶	東京都八丈町宇津木遺跡	1点	17世紀中頃・後半	八丈町教育委員会蔵
129	—	八花卉染付小皿（肥前）	東京都八丈町宇津木遺跡	1点	17世紀前半	八丈町教育委員会蔵
130	—	菊花形花文染付皿（肥前）	東京都八丈町宇津木遺跡	1点	17世紀前半	八丈町教育委員会蔵
131	—	草花文染付小皿（肥前）	東京都八丈町宇津木遺跡	1点	17世紀前半	八丈町教育委員会蔵
132	—	折線形吹墨皿（肥前）	東京都八丈町宇津木遺跡	2点	17世紀後半	八丈町教育委員会蔵
133	—	折線形吹墨皿（肥前）	東京都八丈町鳥打遺跡	1点	17世紀後半	八丈町教育委員会蔵
134	—	山水染付皿（肥前）	東京都八丈町鳥打遺跡	1点	17世紀前半	八丈町教育委員会蔵
135	—	石榴文染付皿（肥前）	東京都八丈町鳥打遺跡	1点	17世紀前半	八丈町教育委員会蔵
136	—	草花文染付皿（肥前）	東京都八丈町鳥打遺跡	1点	17世紀前半	八丈町教育委員会蔵
137	—	山水図陶胎染付碗（肥前）	東京都八丈町鳥打遺跡	1点	17世紀前半	八丈町教育委員会蔵
138	—	青白磁中皿	東京都八丈町鳥打遺跡	1点	16世紀後半（明）	八丈町教育委員会蔵
139	—	染付花鳥文皿	東京都八丈町鳥打遺跡	1点	16世紀後半（明）	八丈町教育委員会蔵
140	—	染付「壽」文字皿	東京都八丈町鳥打遺跡	1点	16世紀後半（明）	八丈町教育委員会蔵
141	—	五三桐文柄鏡	東京都八丈町鳥打遺跡	1点	16世紀末	八丈町教育委員会蔵
142	—	羽根箒図柄鏡	東京都八丈町鳥打遺跡	1点	18世紀後半	八丈町教育委員会蔵
143	—	鶴亀松竹図柄鏡	東京都八丈町鳥打遺跡	1点	19世紀前半	八丈町教育委員会蔵
144	—	ガラス鏡	東京都八丈町鳥打遺跡	2点	20世紀	八丈町教育委員会蔵

映像展示 コンテ1

CUT	内容	画像	セリフ・字幕	時間(min)
C1	●OP +効果音	平成22年度企画展 伊豆半島・伊豆諸島における神社の成立と展開 映像展示 伊豆の祭礼行事と祭祀遺跡 國學院大學伝統文化リサーチセンター	●オープニングタイトル 「平成22年度企画展 伊豆半島・伊豆諸島における神社の成立と展開 映像展示 『伊豆の祭礼行事と祭祀遺跡』 國學院大學伝統文化リサーチセンター」	～0:08
C2	・空から見た伊豆半島 (伊藤慎二氏提供)		◎字幕 「多くの祭祀遺跡や、式内社を含む古社が知られる伊豆半島と伊豆諸島。」 「そんな伊豆の祭祀遺跡からは、今はもう忘れ去られてしまった古いマツリの姿が見えてくる。」 「そして、古社に伝わる祭礼行事からも、「古代人」の祈るココロを垣間見ることができるだろう。」	～0:34
C3	●Chap.1 祭祀遺跡と神道考古学 ・三倉山の日没 (当センター撮影) +効果音	 祭祀遺跡と神道考古学	●Chap.1 タイトル 「祭祀遺跡と神道考古学」	～0:42
C4	・静岡県下田市 三倉山 (大場磐雄博士写真資料ob1167) +効果音(鳥の囀り)	 	◎字幕 「『神道考古学』の提唱者である大場磐雄が、下田の洗田遺跡を訪ねたのは、昭和2(1927)年のことであった。」 「そこで大場は、彼の人生を動かす大きな感動に遭遇する。」 ◎字幕(スクロール) 「この時春の陽も暮れかけて、夕日が西へ傾いた時、遺跡の西方に陽を背景にして兀然と私の眼底に映ったものは、三倉山の麗姿であった。三輪山に似た三角形の美しい小山、土地では吉佐美富士と称し、頂上に浅間社を奉祀するという。古代人が神の憑依すると考えた対象こそ、この山ではあるまいか。この祭祀遺跡はこの霊山を対象として行なわれた跡だろう。私はこの時一種の靈感に打たれたといっても過言ではなかった。私にはまだ残された仕事がある。古代祭祀址の研究こそ、その主眼となるべきではあるまいか、こんなことを思い立たせたのであった。大場磐雄『神道考古学学生立ちの記』より」	～1:42
C5	・静岡県下田市 三倉山山頂 (大場写真資料ob1162) +効果音(鳥の囀り)		◎字幕 「後に大場が『神道考古学』を提唱した背景には、このような実感をえた経験があった。」	～1:50
C6	・静岡県下田市 三倉山山頂 (当センター撮影) +効果音(鳥の囀り)		◎字幕 「以来、國學院大學では、伊豆半島や伊豆諸島を主要な研究フィールドとしている。」 「伝統文化リサーチセンターの研究活動も、これらの継承と発展を目的の一つとするものだ。」	～2:09
C7	●Chap.2 洗田遺跡と三倉山 ・三倉山から洗田遺跡を望む (大場磐雄博士写真資料ob1168) +効果音	 洗田遺跡と三倉山	●Chap.2 タイトル 「洗田遺跡と三倉山」	～2:17
C8	・静岡県下田市 洗田遺跡出土資料 (本学所蔵) +効果音(虫の声)		◎字幕 「大加茂川東岸の台地上に位置する下田市洗田遺跡は、古墳時代中期・後期の祭祀遺跡である。」 「出土遺物の組成からは、当時の日本列島で広く行なわれた祭祀行為と共通する様相がうかがわれる。」	～2:35
C9	・静岡県下田市 三倉山の日没:動画 (当センター撮影) +効果音(虫の声)		◎字幕 「その一方で、遺跡の真西に位置する三倉山の存在も見逃すわけにはいかない。」 「春分・秋分の前後に遺跡から三倉山を望むと、山頂付近に沈む夕陽を拝することができる。」 「このような現象は、地域社会の『自然暦』と無関係ではなかっただろう。」	～3:56

CUT	内容	画像	セリフ・字幕	時間(min)
C9 続き	同前		◎字幕 「恐らく、ここでは汎列島的なマツリと同時に、地域の事情や独特の景観に根差した祭祀行為も行なわれていたに違いない。」 「その後、律令制が布かれると、この地域の中心は、加茂郡衙が置かれた青野川流域に移った。」 「洗田の丘で行われていたマツリも、大場磐雄によって再発見されるまで、長い眠りについたのである。」(この字幕は、日没のタイミングに合わせる。)	同前
C10	・静岡県南伊豆町 日野遺跡 (当センター撮影) +効果音(さざ波)		◎字幕 「古代の青野川流域では、南伊豆町の日野遺跡や、日誌遺跡などに顕著な祭祀行為の痕跡が認められる。」	~4:07
C11	・東京都三宅村 富賀浜から三本根を望む (当センター撮影) +効果音(さざ波)		◎字幕 「日野遺跡や、三宅島(東京都三宅村)の富賀浜遺跡からは、奈良三彩と呼ばれる貴重な焼き物が出土した。」	~4:17
C12	・東京都三宅村 富賀神社 (当センター撮影) +効果音(さざ波)		◎字幕 「いずれも、奈良時代の国家的な祭祀が、伊豆半島や伊豆諸島に及んだ事実を示すものであろう。」 「この富賀神社や、下田の白濱神社は共に三嶋大明神を祀る古い神社である。」	4:37
C13	●Chap.2 白濱神社と古代・中世の祭 ・静岡県下田市 白濱神社境内 (当センター撮影) +効果音(さざ波)		●Chap.2 タイトル 「白濱神社と古代・中世の祭」	~4:44
C14	・白濱神社発行絵葉書 「白浜神社社頭」 (大場磐雄博士資料) +効果音(さざ波)		◎字幕 「平安時代以降の伊豆半島南部では、特に白濱神社の周辺が主要な祭祀空間となってきた。」	~4:53
C15	・白濱神社発行絵葉書 「白浜神社拝殿」 (大場磐雄博士資料) +効果音(さざ波)		◎字幕 「白濱神社は、三嶋神と后神を祀る神社であり、式内社の伊古奈比咩命神社に比定される神社としても著名である。」	5:02
C16	・静岡県下田市 火達山遺跡出土資料 (白濱神社蔵) +効果音(さざ波)		◎字幕 「その境内に所在する火達山からは、平安時代に行われた祭祀行為の実態を物語る遺物が出土している。」	~5:11
C17	・白濱神社 火達祭:動画 (当センター撮影) +効果音(虫の声)		◎字幕 「かつては旧暦9月20日・21日の例大祭に際して、火達山の頂上で火を焚き、厳粛に火達祭が執り行われていたという。」 「今でも、10月末の例大祭期間中に白浜海岸で行われているこの祭儀は、伊豆諸島の神々に対する祭祀行為と考えられる。」 「当然、かつての静謐さとは趣を異にしているものの、古人のココロを今に伝える貴重な祭礼といえよう。」	~6:20
C18	・静岡県下田市 夷子島遺跡 (当センター撮影) +効果音(さざ波)		◎字幕 「伊豆諸島の神々に対して火を焚いたであろう痕跡は、夷子島遺跡や三穂ヶ崎遺跡でも確認された。」	~6:29

映像展示 コンテ3

CUT	内容	画像	セリフ・字幕	時間(min)
C19	・静岡県下田市 三種ヶ崎遺跡 (当センター撮影) +効果音(さざ波)		◎字幕 「三種ヶ崎遺跡の発掘調査は行われていないが、かつてここを踏査した原一政氏によれば、祭祀遺物と共に炭化物が散布していたという。」	～6:38
C20	・白濱神社 火達祭 (当センター撮影) +効果音(さざ波)		◎字幕 「恐らく、火達祭のようなマツリは、少なくとも古墳時代以来、この地域で行われてきた祭祀を受け継ぐものなのだろう。」	～6:47
C21	・白濱神社発行絵葉書 「白濱神社境内堀離取場」 (大場磐雄博士資料) ※クロスフェード		◎字幕 「白濱神社の例大祭の終わりを告げるのは、白浜海岸で行われる御幣流しである。」	～6:52
C22	・白濱神社 御幣流 (当センター撮影) +効果音(さざ波)		同前	～6:56
C23	・白濱神社 御幣流:動画 (当センター撮影) +効果音(さざ波) ※クロスフェード		◎字幕 「祝詞が奏上された後、御幣が次々と海中へ流されていく。」 「考古資料には残されていない地域信仰の実態が、このような祭礼の姿から見えてくる。」	～7:49
C24	・静岡県下田市 白濱神社境内出土資料 (白濱神社蔵) +効果音(さざ波)		◎字幕 「ちなみに、白濱神社境内からは、江戸時代に中世の和鏡が出土したと伝わる。」	～8:09
C25	・三宅島の島影 (当センター撮影) +効果音(さざ波) ※フェードアウト		◎字幕 「中世・近世の伊豆諸島では、和鏡を伴う積石塚の信仰が盛んであった。」 「白濱神社の鏡は、中世の伊豆諸島と伊豆半島で、共通したマツリを行っていた可能性を示唆している。」 「伊豆の神、三嶋大明神の信仰は、遥か大海原に浮かぶ島々と、それを遷移する半島側で、均しく守り伝えられてきたのである。」	～8:39
C26	●ED +効果音(さざ波)		◎字幕 「終」 ◎字幕(スクロール) 「制作 國學院大學伝統文化リサーチセンター センター長 杉山林雄」 「監修 内川隆志 吉田恵二」 「脚本 深澤太郎」 「編集 加藤元康」 「撮影 石井匠 新原佑典 田中大輔 土屋健作 塩谷風季 朝倉一貴」 「画像提供 伊藤慎二」 「制作協力 中村耕作 宮川博司 齋藤しおり」 「協力 栗木崇(共同研究員・熱海市教育委員会) 笹生衛(國學院大學) 外岡龍二(下田市文化財審議会) 中村大(共同研究員・総合地球環境学研究所) 原一政(郷土史研究者) 原嘉孝(白濱神社) 藤井建彦(元下田市教育委員会) 増山順一郎(下田市教育委員会)」 ◎字幕 「(C) 國學院大學伝統文化リサーチセンター 2010」	～9:30

第3章 トークイベント『伊豆の祭祀遺跡と神・仏』

日時：平成22（2010）年6月23日（水） 18時～20時半

会場：國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館 メディアウォール前

パネリスト：三橋健（大学院客員教授）、笹生衛（当センター・神道文化学部教授）、内川隆志（当センター・学術資料館准教授）、深澤太郎（当センター・学術資料館助教）、中村耕作（当センター・文学部助手）

コメンテーター：吉田恵二（当センター・文学部教授）・俵寛司（サイバー大学助教）

I. はじめに

（1）映像展示の紹介

深澤 本日は、お集まりを頂き誠にありがとうございます。國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館の平成22年度第1回企画展、『伊豆半島・諸島における神社の成立と展開—祭祀考古学研究と校史資料活用の現場から—』の関連事業として、「伊豆の祭祀遺跡と神・仏」と題したトークイベントを開催したいと思います。

この企画は、皆さんにご覧頂いている企画展の関連イベントであると同時に、当センターの内部で行っている今年度第1回目の横断研究会も兼ねています。こういった形で1時間半、あるいは2時間程度、皆さんと伊豆のマツリについて考えていきたいと思っていますが、資料の展示に加えて、関連する映像展示「伊豆の祭礼行事と祭祀遺跡」も製作しました。実は、5月から始まっているこの企画展なんですけれど、映像が出来たのはつい先ほど。出来たてのホヤホヤです。今日からの公開になりますので、お披露目ということで。10分弱ですので、先ずこちらをご覧になって頂いてから本題に入ります。では、宜しくお願い致します。

（2）パネリストの自己紹介

深澤 …という映像なんですが（コンテ参照）、今から出てくる話題の背景は、ある程度掴んで頂けたのかな、とおもっております。

では、早速始めたいんですけど、申し遅れました。私は、学術資料館の深澤太郎と申します。僕はですね、吉田恵二先生が担当しておられました文学部の考古学実習で、それこそ学生時代から考古学研究室の助手になるまで、ずっと三宅島の中世・近世の積石塚を調査しておりまして、それ以来、この地域の研究には相当な関心を持って参りました。学問的な関心も勿論ですが、ある意味ではですね、島が第二の故郷と言ってはあれですけど、半ば信仰的な気持ちにもなりながら研究を進めているわけです。そういったことで、この展示に合わせて、このようなイベントをコーディネートしたわけですね。

そこで、先ずはですね、パネリストの先生方による簡単な自己紹介から始めたいと思います。じゃあ、中村先生からお願い致します。

中村 はい、考古学研究室で助手をしております中村耕作と申します。本日は、宜しくお願い致します。私はですね、本来の専門といいますのは、縄文時代の考古学、縄文時代の祭祀・儀礼ということでもありますけれど、実はですね、私の生まれ育った神奈川県伊勢原市というところに、大山というお山がありまして、そのことを小さい頃から調べていた、という経緯がございます。大山というのは、かなり昔から知られている信仰対象の山なんですけれど、いつ頃からそういった信仰があるのか、ということを調べていきますとですね、國學院大學の大場磐雄という先生が、そういう昔のことを調べている、ということを知りました。

まあ、私の関心はどんどん古くなっていったわけなんですけれど、そういった背景がありまして、私がちょうど國學院大學に入学した時からですね、学術フロンティア事業として大場先生の資料の整理が大学で始まりまして、それ以来、縄文時代の研究と共に、大場先生の資料の整理、というのをやって参りました。今回の展示でも、一番始めのところに一つ第Ⅲグループからのコーナーを設けさせて頂いております。大場先生という「神道考古学」の大成者でありますけれど、やはりですね、我々もその遺志を継いで、國學院大學で祭祀・儀礼の研究をやる、そういうためにはですね、縄文時代、弥生時代、古墳時代と色々な時代があります

けれども、やはり原点である大場先生の研究を振り返ることが大事であろう、と考えまして、大場先生の研究というのも併せてやっている。という次第でございまして、今日呼ばれた、ということでございます。どうぞ宜しくお願い致します。

笹生 神道文化学部の笹生衛と申します。私は、國學院大學に来てまだ2年目。ですから、まだ新参者なんですけれど、学部も大学院も國學院を出ています。大学院を出た後にですね、実は私は、千葉県の教育委員会で24年、埋蔵文化財の調査・研究、それから指定文化財行政などを担当してきました。後でまた話をしますけれども、そこでは、大規模な古代の集落の発掘調査を随分経験しました。私、大学では、神道を勉強していたんですけども、古代集落を掘っていたら意外と仏教の関係の遺物が、古い8世紀くらいからどんどん出てくる、ということを経験しまして、それから村の中の仏教信仰を追っかけていきました。神仏を両方跨いでですね、色々と考古学的に研究をしてきたという経歴があります。今日も、基本的には、神様の話と、仏さまの話。それを、さらに時代を通して、弥生から中世まで見通したらどのように見えるのか、というような視点で、お話をさせて頂ければな、と思っています。宜しくお願い致します。

三橋 三橋健と申します。この3月まで、本学の神道文化学部の専任教員をしておりましたが、定年退職を致しまして、現在は大学院の客員教授をさせて頂いております。はたして私のような老生が役に立つのかどうか、甚だ覚束ない限りであります。今日は『三嶋大明神縁起』について、ちょっと皆さんに「こういうものも大切ではないだろうか」と申し上げたいと思っています。

私は本学の国文学科を卒業したのですが、大学院では神道を専攻いたしました。そのとき、大場磐雄先生の神道考古学を聴講し、忘れられないほど深い感動を受けました。ご承知のように、大場先生は神道考古学を樹立されたのであり、当時としてはとても斬新な講義でした。祭祀遺跡や神奈備山あるいは磐座などの研究を通して神社祭祀の源流を明らかにしました。また、先生は神像、古鏡、御正体、神宝など神社の文化財にも造詣が深く、私どもが昭和39（1964）年11月に神道美術研究会を設立したとき、先生には顧問になっていただき、発足の記念会には有意義なお話をたまわることができました。この神道美術研究会は現在、私が会長をしています國學院大學神道史学会の前身です。

このように大場先生からの学恩は枚挙にいとまがありませんが、なかでも熱海市史を編纂するため、伊豆山神社の文書調査をするということで、西田長男先生と私に「良い機会だから来るように」とお誘いを受け、お陰様で伊豆山神社の古文書や古記録を集めることができました。また、三河の猿投神社の調査の際にも、懇切丁寧なご指導をいただきました。

私どもが院生であった頃は、私が専攻した神道学専攻は3名でした。文学や史学も多くなかった。そんなことで、神道・文学・史学などというような垣根はあまり意識しませんでしたね。大場先生との思い出は多くありますが、先生はお酒がお好きで、酒豪でした。ときには渋谷の某所へお伴し、酒席ではご自慢の小唄を聞かせて下さいました。

また、さきほど笹生さんのお話にもあったように、大場先生は、しばしば神さまだけでなく仏さまのこともしっかりやらなくちゃいけないといわれました。つまり神道を知るには仏教のことが大事なのです。今日の『三嶋大明神縁起』は、三嶋大明神の縁起ですが、この神さまの本地は薬師如来なのです。つまり、お薬師様の縁起なのです。だから、お薬師さんのことがわからないと、理解できません。

ただ、私の『三嶋大明神縁起』の研究は、もう三十年以上も前のことですので、すっかり古びてしまって、いわばボンコツ車と同じであります。しかも、少しかじっただけのことで、なんだか昔の古傷に触るようで恥ずかしいのですが、なにとぞお手柔らかにお願い致します。

内川 皆さん今晚は。学術資料館の内川でございまして。私が20代の頃、東京都教育委員会に伊豆諸島の埋文行政を中心的に担当されていた川崎義雄さんがいらっしやまして、随分お世話になりました。その方が、ずっと伊豆諸島の調査をされておまして、学校の宿舍の建て替えだとか、そういう度に、本学の青木豊先生と一緒に埋蔵文化財調査のお手伝いをさせて頂いた、ということが、私の伊豆、伊豆諸島での発掘の始まりで

す。以来30年、青ヶ島を除く全ての島で発掘調査をしております。後ろに展示しております伊豆諸島の遺跡については、大方が私たちの手掛けたものでございます。特に、利島村からお預かりしている阿豆佐和気命神社境内祭祀遺跡の資料は、かなりボリュームがありますが、この夏に地元へ返却することになりましたので、是非皆さん、ゆっくりご覧になって頂きたいと思います。宜しくお願い致します。

Ⅱ. 討論の趣旨

(1) 討論の背景

深澤 どうも有難うございました。あの、話が前後しちゃって恐縮なんですけれども、先ずは企画の趣旨、ということですね。中村先生のお話にもありましたように、國學院大學では、大場磐雄先生が「神道考古学」を提唱されました。そして、大場先生以来、伊豆半島、あるいは伊豆諸島という地域を「神道考古学」研究のフィールドとしてきた経緯があります。これから、色々な事例が出てくるといえますけれども、古墳時代から古代にかけてヤマト政権や律令国家の影響下で行われた祭祀行為や、積石塚と和鏡を特徴とする中世・近世のマツリ、といった考古学的な「祭祀遺跡」が主な研究対象になってきました。その一方で、三橋先生が仰ったような三嶋大明神の信仰といったものもこれあり、伊豆を対象とした研究の議論については、その種が尽きないわけです。

ところで、この伝統文化リサーチセンターですけれども、その設立の趣旨の一つが、國學院の学術資産を活かしながら、考古学であるとか、文献史学であるとか、あるいは神道学、といった研究を進めていこうと。過去の研究を振り返りながら、新しい未来の研究を生み出していこうと。こういったことを考えている組織なんですね。そういった意味から考えますと、國學院による長い研究の蓄積が豊富な伊豆地域を、一つのフィールドにして研究を進めていくというのは、大変意義のあることではないかと考えているわけです。

(2) テーマの設定

深澤 それで、これから進めていく討論は、大きく四つのテーマを柱に進めていきたいと思います。最初の三つは、どちらかというと考古学関係、最後の一つは三嶋さん関係の話になろうかと思いますけれど。

先ずは、大場先生の「神道考古学」が形成された過程の問題と、方法論の問題ですね。大場先生の研究方法を、これからどうやって発展させていくのか。「神道考古学」・「祭祀考古学」の現状と課題はどこにあるのか、といった前提的な議論を行います。

そして2番目としては、7世紀の半ばから8世紀の頭くらいにかけて、いわゆる「神祇祭祀」が成立していくわけですが、祭祀の場であるとか、「神祇祭祀」の道具立てであるとか、そういったもののモデルが、どのように形成されたのか。また、このような「神祇祭祀」が、伊豆半島・伊豆諸島という地域的で、どのような具体像を見せているのか、といったことを検討していきます。

3番目には、さらにこれを受けまして、中世はどうか、と。まさに、15世紀前後の成立と考えられる『三嶋大明神縁起』に描かれた世界。これを考古学的に見るとどうなのか。ということ、ある意味では横軸、まあ黒潮圏と言ってもいいかと思いますが、横の空間軸で見通す。或いは、日本宗教史の画期を捉えて、縦の時間軸で見えていく、といったような議論をしていきたいと思います。

そして、最後に、『三嶋大明神縁起』に描かれているような世界観。これは、中世の伊豆諸島・伊豆半島のお祭り、とりわけ考古学的な現象とも密接に関わってくる問題です。ですから、考古資料を残した同時代的な人間たちが、どういったことを考えていたのか、といったような議論を進めていきたいと思います。

Ⅲ. 「神道考古学」の形成と方法論

(1) 校史資料の再整理・活用と「神道考古学」形成史

深澤 早速ですが、先ず最初に、この伝統文化リサーチセンターでもですね、いま中村さんが仰ったように、校史資料の活用ということを進めているわけですが、そういった中から、「神道考古学」の形成史といっ



中村 耕作

た所にも、新たな知見が見えてきている、ということで、先ずはその辺からですね、ご担当されていた中村さんのほうからお話を振って頂きたいと思います。宜しくお願いします。

中村 はい。今日のお話のメインはですね、先ほど出てきた映像の続き。つまり三嶋の神、というところがメインになってくると思いますので、私のほうは簡単にお話ししましょう。

そこで、既にご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、けれども、大場磐雄と神道考古学、これが一体どういった人で、どういった学問なのか。ということについて、先ず簡単にご紹介させていただきます。大場磐雄先生といいますのは、明治の終わり頃ですね、明治32（1899）年にお生まれになった方です。ちょうど考古学では、例えば縄文土器の山内清男先生であったり、弥生土器の森本六爾先生であったり、仏教考古学の石田茂作先生であったり、そういった研究の基礎を作った先生方と同世代に当たりまして、先生ご自身もまた、一つ「神道考古学」

という分野を立てられた、ということでございます。もともと考古少年でありまして、鳥居龍蔵という東大の人類学の先生のところで、ずっと勉強していたわけですが、折口信夫という民俗学の大家になる先生が國學院大學の講師になる大正8（1919）年の前年に國學院大學に入学しました。以降、折口先生に大変傾倒していきます。で、考古学もやるんですけど、一方で昔話の採集とかですね、そんなこともやっていきます。最初の著作も、『民俗叢話』という民俗学の本だったわけです。

そんな大場先生なんですけれども、大学を卒業した後、一旦中学の先生、今でいう高校の先生をやりまして、すぐに内務省神社局という役所に入ります。これはですね、戦前は、神社というのは国の役所のような扱いでして、それを取り締まる役所です。特に、大場先生が入ったのは、考証課というところで、神社の由緒を調べて、上は官幣大社から下は無格社まで神社に序列があるわけですが、そういった序列を決めるための調査をする部署だったわけですね。そこで、平常展でも紹介しているんですけど、宮地直一先生という人のところで、今度は神道の古典とかですね、文献をひたすら読む、という訓練を積む。そんなことをやっていきます。そういうことで、その後「神道考古学」を大成されて、戦後ですね、國學院大學の考古学の教授として着任されまして、考古学専攻を作るとかですね、といったことで活躍されました。

色々な時代のことを研究されたわけですが、「神道考古学」というものを作られたということが、今回の話では重要なことになりますので、そのプロセスをですね、簡単に見ていきたい。その中で、特に伊豆の遺跡の調査をですね、絡めていくと、どういうわけか大場先生の研究の特徴的な所が見えてきますので、伊豆の調査を中心にしながら、ちょっとお話してみたいと思います。

大場先生は、もともと縄文時代の土偶とか、石棒とかの研究をやっていたわけですが、縄文時代の遺跡を調査している時期に、さっきの映像で出てきた洗田遺跡に出会うわけです。縄文時代の調査をやっているからといって、他の時代に目を配らない、っていうことではなくて、そこら中の遺跡に目を配っていたわけですが、そこで運命的な出会いをするわけですね。その時に、ここが「祭祀遺跡」だ、お祭りの場だ、という決め手になったのが、石製模造品という道具であります。こちらにも展示してありますけれども、お祭り専用に使われた道具ですね。ミニチュアの製品なんですけれども、それが出ているから、ここはお祭りの場だと。同じものは、古墳からも出てくるんです。つまり、ここは古墳時代のお祭りの場だとわかるわけです。実はですね、その当時、大正・昭和の頃から、色んなところでですね、神代の時代の遺跡だとか、巨石遺跡だとか、あの山はピラミッドだとか、そういった学術的な根拠のない話があったわけです。しかし、大場先生は、これは古墳時代の資料だ、という評価に石製模造品という道具を使ったんですね。つま

り、怪しげな、神懸った人たちのいうところの太古の遺跡、というものと、考古学的な遺物を使って実証した古墳時代のお祭りの場、というものを区別するために、模造品というのは非常に重要な役割を果たした。その切っ掛けが、この洗田遺跡だった。

その後ですね、大場先生は、色々なお祭りの遺跡を廻りまして、昭和10（1935）年に「神道考古学の提唱とその組織」という論文を出すんですね。ここで、「神道考古学」というものが提唱されるんですけども、その後に、もう一度洗田の調査を行います。この時にはですね、大場先生色々な遺跡を見ていて、石製模造品を出すような古い遺跡のそばに、例えばすごく綺麗な山があるとか、或いは大きな石の下から遺物が出てくるとか、そういうことを把握されていたので、洗田遺跡においても、先ほどの映像に出てきた三倉山というのが、この遺跡の祈りの対象であったんだろう、ということを考えました。幸い、近くに延喜式内社の伊豆奈比咩命神社とされる神社がありまして、つまり洗田遺跡のお祭りが、その後そういった神社に継承されていくと。つまり、山があって、遺跡があって、神社がある、という典型的な例。もちろん、典型的な例ってというのは、平常展で紹介している奈良県の三輪山もそうなんですね。石製模造品があって、大神神社があって、三輪山がある。これと同じような場が地方にもある、ということ、ここで仰るわけです。その後、昭和18（1943）には、先ほどもちょっと映像に出てきました白濱神社の調査成果が出ていますね。神社の調査と言いますのは、先ほど申しましたように、大場先生の本業でありますので、詳しく調べるわけです。そこで、後ほど出てくる『三嶋大明神縁起』とかですね、そういったものにも触れていくわけです。

そういった大場先生の研究の成果がですね、博士論文、これは戦後すぐ出されるんですけども、それをベースに昭和39（1964）年に発表されたのが「神道考古学の体系」という論文なんです。そこでは、祭祀遺跡を大きくA・B・Cの3つに分けております。「A：遺跡を主とするもの」、「B：遺物を主とするもの」、「C：遺物の発見されないもの」、ということですけども、注目して頂きたいのは「Aの1：自然物を対象とする遺跡」です。そこでは、山とか、石とか、木とか、水とかですね、そういった信仰対象を細かく分けています。逆に、大場先生がどこに注目されていたのか、どこを重視したのか、ということが分類の細かさからわかると思います。これらは、単に模造品なんかが出土するだけでなく、現在も信仰の対象になっているものが多い。むしろ、それが大きなヒントになっている。これが、最終的に大場先生がまとめられた『祭祀遺蹟』とか、『神道考古学講座』といったシリーズ物に転載されていきまして、先生の最終的な考え方というふうに見なされているわけです。

ただ、それが大場先生の最終的な研究だったのか、というとは実はそうではなくて、昭和50（1975）年に亡くなった後で出た本なんですけど、『考古学上から見た古氏族の研究』という本をまとめられております。どうということかといいますと、神社とかですね、集落とか、古墳とか、あるいは地名もそうなんですけど、色々な情報を使って古代の氏族がどういうふうに展開していったのかを考えている。「神道考古学の大系」に書かれたことは、どちらかというと日本古来、雑駁な言い方をすると、あまり歴史的な流れを考えていないような体系なんですけれど、そこで仰っているのは、いつ、どういう切っ掛けで、畿内から人が動いていったんだと、というようなことを研究されている。で、実はですね、先ほどは話を飛ばしたんですが、洗田遺跡の報告で、ちょこっとその問題について触れられているんです。但し、あんまり後々の所で出てこない。やっぱりこの「神道考古学の体系」、というのがメインに来てしまったくらいがあるんですけど、やはり歴史的な文脈というのを意識しなきゃいけないんだろう、ということですね。

もう一つ注目したいのは、「神道考古学の体系」で示した信仰対象の事例について、池に鏡を投入する「鏡ヶ池型」や、島嶼を対象とする「沖津宮型」などといった水霊の事例の最後に、群島を対象とする「三嶋型」というのを設定しているんです。これは、具体的に「伊豆諸島など」、と示されているんですが、ほかのタイプが全国どこにでも想定されるのに対して、「三嶋型」という非常にローカルなものをここで設定している、ということも、今日のお話の中でちょっと注目しておいていいんじゃないかな、と思います。

このようにですね、大きく分けて何段階かあるわけですけど、「神道考古学の大系」に結実したものと、

それに漏れたもの、というのがある、ということですね。大場先生は、ガラス乾板を5,000枚ほど残されておられますが、そういうのを1つ1つ整理しながら、大場先生の足取りを追っていくために、色々な論文を読んでいった結果ですね、そういった問題が明らかになってきました。新発見の資料というのは、なかなか無いんですけども、改めてそういう資料を位置付ける過程の中でですね、今後の祭祀・儀礼の考古学を考えるですね、課題となってくる部分っていうのが、幾つか見つかった、というのが現状でございます。

深澤 ありがとうございます。オープンリサーチセンター事業以前に行っていた学術フロンティア事業などで、お話があったような写真乾板の整理ですとか、そういった基礎的な資料の整理が進んできまして、「大場学」と言ってもいいような「神道考古学」の形成に関しても、以前に比べればより具体的な情報が手に入るようになってきた、と言えるかと思います。そういったことに、中村さんなんか長く関わってこられたわけですよね。で、今のお話をある程度まとめてみますと、「大場学」の形成にはですね、やはり伊豆の遺跡が、かなり密接に関わっていたんだ、ということが1つ。そして、もう1つは、「大場学」の形成という中で、折口民俗学ですとか、或いは宮地先生の神道史学といったようなものの影響を色濃く受けている、と。

その内、折口民俗学の影響に関して言えば、多摩美術大学の安藤礼二先生などが、折口学の背景にも、当時の民族学、エスノロジーの影響が色濃くあったのではないかと、というような指摘をされていますね。我々、大場先生の学問と言うと、折口先生、ないしは宮地先生というところで止まってしまうんですけど、もっと深く見通していくとですね、まさに近代の人文学が形成されていく中で、この「神道考古学」の形成っていうのもあったんじゃないかな、と言えるのではないかと思います。

(2)「神道考古学」・「祭祀考古学」の現状と課題

深澤 また、今の中村さんのお話の中にもありましたように、大場先生の「神道考古学の体系」の中では、自然物を対象とする祭祀遺跡は、大袈裟に言えば事例の数だけ多様性を認めている、と。もう一方で、祭祀に関わるモノとしてはですね、実物ではなくて模造品、ミニチュアを大変重視された、という話でしたが、この問題はですね、今日の祭祀考古学研究の水準からは、かなり大きな問題になってくるかと思います。そこで、「神道考古学」ですとか、「祭祀考古学」の現状と課題を見据えるといったような意味でも、こういった大場先生の考え方を今日的な視点から見直すとどうなのか、といった所から、笹生先生お願い致します。

笹生 では、いま深澤さんからの問題提起を受けまして、私の方から幾つか指摘したいと思います。いま中村さんからも話がありましたように、大場先生の一番大きな業績というのは、何と言っても「祭祀遺跡」という概念そのものを作ったことです。その記念的な遺物が、後ろに展示してある洗田遺跡の遺物です。昭和2(1927)年に発掘調査をして、そこを「祭祀遺跡」と評価していくわけですね。通常展示にある三輪山の遺跡の方は、大正7(1918)年に発見されているんですけど、その時は、古墳として報告されているんです



笹生 衛

ね。それは、樋口先生が、残された遺物を分析しながら、祭祀の跡、と最終的には結論付けているわけです。仏教考古学と神道考古学の大きな差っていうのはどこかと言うと、仏教考古学の場合は、信仰の場が明らかに寺院遺構として確認できるわけです。それに対して、祭祀遺構、もしくは祭祀遺跡というのは、その段階では考え方さえ無かった。それを明確にしていって。それが大場先生の一番大きな業績になっています。ですから、いま中村さん、深澤さんからも話がありましたけれども、祭祀遺物、特に素文鏡や石製模造品、土製模造品、それから金属製の模造品、手捏土器と言われるような、特殊な遺物に注目をして、その遺物を中心にしたマツリのイメージを形成せざるを得なかった、ということになります。

そうして、50年代の初頭に大場先生は亡くなるわけですが、その頃までに「神道考古学」の研究は進んでくるわけです。その中で、

中村さんがお話されたような体系というものも形成されてくるわけです。その後の世代では、考古学も大きく変わっていきます。先ほど話をしましたように、私はその頃、20代から30代で、来る日も来る日も、当時は土曜日も発掘調査やっていたので、日曜日だけお休み、あとは殆ど一日中発掘、という生活を送っていました。そういう中でも大規模な、1回で何万平方メートルも掘ってしまう調査では、1つの集落を全部掘ってしまう。群馬県子持村の黒井峯遺跡のように、集落全体の状況がわかってくる、ということもある。30代のころは、高速道路建設、大規模な宅地造成に伴い、今まで掘らなかった水田の下、川の周辺、そういう所の発掘調査も随分やりました。昭和50年代から平成にかけての埋蔵文化財の発掘調査の話をしましたが、ここでは精密な国家座標に基いた、きちんとしたデータを取っています。精密な発掘調査、現代的な発掘調査をやってきました。今までは祭祀遺物が出れば祭祀遺跡だと、というような形で捉えてきた。ですから、大場先生の分類を見て頂くと、かなりスポット的なんです。場所場所で、ここは祭祀遺跡、この祭祀対象は岩、ここは木、ここは山、というような形にしていますけど、50年代以降の考古学のデータはそうではなくて、3次元的に色々なものが景観的に復元できる情報が累積してきました。その情報も、国家座標や標高をミリ単位で記録していくような精度ですから、祭祀遺構そのものが具体的に復元ができるようになってくる。正確な祭祀遺構のデータ化ですね。

それから、一番大きな点はここなんですけれども、祭祀遺物にはどういうものがあるのかということです。いままで言っていた、石製模造品、土製模造品だけではなく、その他の要素。これは後で話をしたいと思いますが、実は、石製模造品、土製模造品や、いわゆる素文鏡と言われるような祭祀遺物というのは、祭祀の場を構成するものではあるけれども、それが全てではない。その他に、様々なものがあつた可能性がある、ということ、私自身考えています。

また、集落の中における、どういう場所で祭祀が行われているか。集落だけではなくて、川の周辺、それから、今まで言われていたような、大場先生が取り上げていたような祭祀遺跡そのものが、地域景観の中でどういう位置にあるのか、というような所も含めて、もう少し、面的に、複合的に分析をしていける条件が、いま揃いつつある。そういうデータが揃ってきている、ということになります。

それを受けて、杉山林継先生は、「祭祀考古学」ということで、神道に限らず、もう少し広く見てみよう、というわけで、祭祀考古学会を立ち上げて頂いているわけです。そういう意味で、昭和の初期に大場先生が祭祀遺跡の認定から始めたものが、大場先生が亡くなった直後に考古学をめぐる環境そのものが、かなり大きく変化した。その結果、今まで開発に伴って行ってきた発掘調査っていうものも、莫大なお金を使っているわけなんですけれども、それをきちんと利用しながら、他の集落遺跡、生産遺跡にしても、古墳にしてもみなそうなんです、それと同じように、精度の高い、さらに広域的な視点で分析できるデータが、いま揃いつつあるのです。そういう視点で、神道考古学、もしくは祭祀考古学を、改めて組み上げ直す段階にきているだろうと、私は考えています。以上で宜しいでしょうか。

深澤 ありがとうございます。いま先生のお話にありましたようにですね、大場先生の業績の中で大きなものとしては、「仏教考古学」に肩を並べる体系としての「神道考古学」というのを打ち立てなきゃならん、と。その中で、「祭祀遺跡」とか、「祭祀遺物」といった概念を立ち上げていくわけですが、やはりそこには1つ大きな問題があるだろう、と思います。仏教と違ってですね、神道は教義も経典もありませんし、例えば仏像はこう作るんだ、というような儀軌に相当するものもない。そうすると、神道で使っている道具立てっていうのは、一体どうなのか、ということになってくるわけですね。そうすると、単なる模造品だけで議論ができるのか、というと、必ずしもそうではないだろう、と。最近の考古学の研究を眺めてみても、例えば、吉田恵二先生ですとか、笹生先生ご自身も、果して模造品だけでやっていたのか、と発言されています。

Ⅲ. 「神祇祭祀」成立期における伊豆の遺跡

(1) 「神祇祭祀」の淵源

深澤 そうすると、立正大学の坂詰秀一先生も指摘されていますように、「神道考古学」の歴史考古学化、という所を、ある意味では目指さなければいけないのかな、と。と言うのは、考古学としては、物事の古い部分から見定めて、どう変化していくのか、っていくことを見ていくのが正しい方法なので、大場先生の態度っていうのは、それは正しかったんですけども、問題を整理するとか、神道の道具立てをはっきりさせる、という意味では、やはり謎に包まれた古墳時代の宗教より、古代の「神祇祭祀」という所から、話を説き起こすべきなんではないかな、ということですね。そこで、引き続きの話で、ちょっと恐縮なんですけれども、笹生先生も色々ご指摘されている所ですので、その辺りについてお話をお願いします。

笹生 では、引き続き話をさせていただきます。先ず、祭祀遺跡とは何か、ということになります。大場先生が認定された祭祀遺跡ですが、これは平たくいってしまえば、お祭りを行った後に残されたものが遺跡化する。これが祭祀遺跡、ということになるわけですけども。そうすると、お祭りの遺跡というものが、どういう形でお祭りを終わりにして、その後、どういう形で処理をして遺跡化していったかっていうプロセスを復元しなくてはならない。それは、大場先生の時代までの発掘調査というのは、かなり限定的、面的にも部分的にも、時代的に見てもですね。従って、細かな分析は、なかなか限界があった、ということになります。それが、50年代以降の大規模調査の中で、色々な事例が集積されてきました。

千葉県木更津市の東京湾を見下ろす台地上にある千束台遺跡で、土器の集積が出てきました。これはどういう遺構かという、集落の中で行われたお祭りの跡。これは、よく出てきます。群馬県子持村の黒井峯遺跡でも出ていますが、これは非常にいい具合に、5世紀中頃前後の祭祀遺構、土器集積の上に、100年ほど経った6世紀後半の古墳が築かれています。5世紀中頃から後半くらいにかけて行われていたお祭りの跡が、6世紀の末の古墳でそのままバックされ、現在に残されている。古墳の周辺は、浸食を受けたり、削平を受けたりで、当時の地表面は失われていますが、古墳の下の部分だけは、幸いなことに5世紀後半の段階の状況が、かなり良好な状態でバックされたまま残っていました。出土遺物を見ると、土器の型式も2段階から3段階あり、20年から30年くらいかけて、土器を足しながら、お祭りを続けていたようです。祭りの状況は、土器集積の真ん中に柱を立ててですね、柱の前に須恵器の大甕を置いています。その周りに手捏土器や、高杯、それから土師器の椀や杯、須恵器などを置いた跡がよくわかります。それに、新しいものを足し、片付けながらお祭りをしている。ですから、柱を建て、須恵器の甕を置いて、その周りに土器類を置いていく。ここからは、かなり大量の祭祀遺物が出ています。18,000点に達する白玉も出ていますし、石製の有孔円板、剣形も出ています、土製の鏡も若干出ています。

それだけ見ると、明らかに通常の土器集積を伴った祭祀遺跡だ、ということになりますが、どうもそれだけではない。ここは他に石製の膝形ですね、紡織具、機織り関係の道具を模した石製模造品も出ています。そういう石製模造品だけではなく、100点近い鉄製品がまとまって出ている。その内容を見ると、鉄鏃に代表されるような武器類、それと鋤先、鍬先、曲刃の鎌、穂摘具、それから刀子、鉈、そして斧形ですね。この斧形は、ちょうど沖ノ島21号祭祀遺跡で出てくるものと同じように鉄板を曲げたものです。その他に、矛などを模倣したと思われる小型の鉄製模造品も出ている。さらに、ズラリと短冊状の鉄鋌が出ています。これは、奈良県ウナベ古墳の陪塚である大和6号墳から、大小800枚以上の鉄鋌が出ているんですが、その内の小型の鉄鋌とほぼ同じ。厚さも非常に薄いものです。最近、宮内庁で修復して、一般公開したので、私も現物を見させて頂いたんですけども、それと非常によく似た鉄鋌が、これも30点近く出土しています。ここから、鉄製品がかなりの量、祭祀遺跡に伴っていた可能性が高いだろう、というふうに思っています。

そこで、大場先生が掘られた洗田遺跡を見ると、やはり鉄片が若干ながら出ているんですね。それから、『まつり』でも紹介され、『熱海市史』でも紹介された静岡県熱海市の多賀神社です。多賀神社の境内。これも大場先生が一生懸命掘られた遺跡で、企画展でも資料を並べておりますが、ここでは鉄製の鋤先が出ています。

同じ鉄製品が出土している。全国的に見ると、一番典型的なのは、沖ノ島の21号祭祀遺跡。鉄製品がかなり出ていますが、あれは、ある意味では特殊ではない。私たちが、あまりにも石製模造品、土製模造品に目を奪われてきたんで見落としていた可能性があり、かなりの祭祀遺跡で鉄製品が存在した可能性が高いと思います。そういう意味では、沖ノ島の21号祭祀遺跡は特殊ではなくて、量は当然、地方のものは少ないわけですが、同じ品々が入っているということを、もう一度再認識する必要がある。

これと同じものがですね、実は愛媛県の出作遺跡でも出ている。そこには、石製の紡錘車が入ってくる。その紡錘車が出てくる遺跡を見ていくと、静岡県浜松市の山ノ花遺跡という、川（大溝）の中に、木製の遺物かなり入っている事例があります。そこを見てみると、石製模造品も当然入ってくる。その他に、機織り機具が一式入ったり、杵が入っていたり。あとは、木製の刀形ですね、これは律令制の祈年祭で使われる刀形と類似します。刀形は、『延喜式』の木工寮式に長さの記載があるんですが、それとほぼ同じ大きさのものが、5世紀の段階で使われていることがわかりました。そうなってくるとですね、今まで私たちが5世紀代の祭祀遺跡と見ていた内容がですね、石製模造品や土製模造品だけ見ていると、律令期とかなり差があるんですが、鉄製品・木製品を含めると、律令期のお祭りと、かなり共通している。先ほどの山ノ花遺跡を見るとですね、今の神社で使っている案と、脚の部分は少し形が違いますが、天板の部分は非常に良く似た案も使っている。というようなことになると、古墳時代の祭祀と、その後の律令時代の祭祀とを分けて考えるよりも、かなり共通する部分がある。もっと言うとなさね、古墳時代のお祭りの道具には、鉄製の武器・武具、それから、紡織具や機織り機具で作られる布、それと鉄素材。そのような物が供えられる、と考える必要があります、そう考えると今までの祭祀遺跡のイメージが、かなり変わってくるのではないかと、思います。

そうなってくると、例えば、臼、杵、瓢、柄杓や、案が出る、というような内容についても、恐らくお祭りの場で神饌を作ってくるようなプロセス、特別に神饌を作る、というようなことを象徴している。そのようなことも、実は5世紀くらいまで遡ってくる可能性があるだろう、と考えられます。実際、土製模造品についても、静岡県磐田市の明ヶ島5号墳下層から出土した土製模造品は5世紀前半まで遡ります。これは、古墳の下にパックされていた例です。

また、祭祀の場の近くでは、石製模造品の石屑、もしくは未製品が結構出てきます。それは良く知られているんですが、それだけではなくで、先ほど言った千束台遺跡や出作遺跡もそうなんですが、祭祀の場の近くで小鍛冶の痕跡が確認できます。鉄素材の鉄鋌を使って小鍛冶が行われていたことになります。石製模造品や玉を作り、鉄製品も神様に捧げる物は祭祀の場の近くで作る。そうなってくると、まさに『古事記』に見える天岩戸の物語で、鍛冶屋を呼んできたり、玉造りを呼んできたりしている内容と関連するかもしれない、ということになります。

幅を広げて古代、古墳時代の祭祀遺跡を見ていく。それは、大場先生が掘られた資料でも、充分確認することができる、というところを再度ここで確認する必要があるでしょう。そういう意味では、いままでの古墳時代の祭祀遺跡の研究は、あまりにも模造品、もしくは鏡類・玉類を中心に話が進んできたわけですが、祭祀というものはどういうものなのか、ということを含めて全体を考え直す必要があるだろう、と考えています。宜しいでしょうか。

深澤 ありがとうございます。こういった形で、祭祀の全体像や構造を改めて捉えなおす必要があるだろう、というお話だったかと思います。具体的には、やはり千束台遺跡みたいに、ある程度パックされている遺跡っていうのを、良好な状態で残っている遺跡っていうのを多く比較していく、ということによって、ある程度時期的な道具立ての変化ですとか、そういったところも、もっと詳細が明らかになってくるんじゃないのかな、と思います。もう一つは、この道具立てが、5世紀代の古墳の副葬品に共通してくるだろう、というお話なんですけれども、これについては、2週間前から研究開発推進機構と渋谷区教育委員会が毎週土曜日に開催している『日本文化を知る講座』でも、だいたい議論の対象になっているところでして、今日もですね、次のテーマ、日本宗教史の画期、というようなところでもお話が出てくるかと思います。また、その時に、

その辺りについてお願い致します。

(2) 発掘調査成果に見る伊豆の初期神祇祭祀

深澤 いま、笹生先生の方からは、祭祀に関わる場と道具の全体像、本来の姿、というようなことでお話を頂いたわけなんですけれど、今度は、そういった祭祀構造の伊豆における具体的な実像についてですね、実際、現地の調査に長らく携わってこられた内川先生の方からですね、具体的な資料をご紹介頂きながら伺いたいと思います。先生、宜しくお願い致します。

内川 あ、笹生先生の方から、古墳時代の、5世紀の祭祀遺跡のイメージというのがですね、我々が認識している石製模造品を中心としたものではなく、よりパッキングされたような遺跡ですと、非常にヴァリエティに富んだものが、きっちりと出てくる、と。律令祭祀、神祇祭祀に直結するようなものが、もう既にあった、ということが理解できるわけですが、この伊豆諸島ですね、私どもが神祇祭祀の淵源を示すものとして捉えている遺跡に和泉浜遺跡C地点というのがあります。伊豆諸島ではですね、古墳時代の祭祀遺物として、三宅島の西原、利島の大石山と、こういった石製模造品の祭祀遺跡も無いわけではないんですけども、伊豆下田の洗田遺跡のような、ああいう大規模な遺跡は形成されていません。

ここで私が紹介する和泉浜ですが、大きくブロックが5ヶ所、さっきの千束台遺跡と非常に良く似た形で形成されている、ということがおわかり頂けると思います。立地的に言いますと、伊豆大島の非常に海に近い海浜部、海から10mほど離れた、本当に波打ち際に近いってような所に作られています。発見の経緯から言えば、昭和60(1985)年に地元の高校生が砂を掘っていたところ、たまたま遺物が発見されて、都の教育委員会が予備調査をしました。第4ブロックの一部が、予備調査された部分ですね。その後、これを受けて東京都教育委員会が、昭和61(1986)年に第5ブロックの所を全部発掘調査しまして、そして我々が、平成5(1993)年と平成7(1995)年の2次に亘って、第4ブロック、予備調査の周りの部分と、第1・第2・第3ブロック、これを調査したわけでありまして。

第1ブロックでは、金と銀の短冊形、我々は金錠・銀錠と呼んでおりますけれども、これが出てきた。展示もしておりますが、他に全く類例が無いということで、特に注目すべきものです。それから、多数の須恵器・土師器、それに、先ほども千束台のところで言われました鉄製の武器類ですね。鉄鏃であるとか刀剣類、それからガラス玉等が集中して出てきております。非常に濃密なまとまりを見せているのが第1ブロックです。第2ブロックは、勾玉とか石製模造品、ですから、古墳時代の祭祀と共通するような、少し時代的に古い模造品が入っている。それから、細かく粉碎された土師器類。徹底的に割っているんです。自然に土圧で割れちゃうんじゃないくて、その場でお祭りをして、その場で踏ん付けているイメージですね。そういったものが集中的に第2ブロックでは出ております。それから第3ブロック。これは非常に小さい、コンパクトな遺物の集合体ですけども、ここでは少し時代的に新しくなります丸底の長頸壺と呼ばれるもの、それと土師器によって形成されています。で、第4ブロックですが、ここではガラスの玉、滑石製の丸玉ですとか、特に鈴であるとか、少し時代が古くなって6世紀に遡る銅製の釦。鈴の付いた鈴釦ですね。あるいは、石製の紡錘車、といったものが入っております。第5ブロックは、東京都が調査した部分ですが、非常に多数の刀・鉄矛・刀子といった武器類の集中ポイントになっているわけでありまして。

年代なんですけれども、須恵器が緻密に分析されております。これは、静岡県湖西地方の須恵器ということで、地元の後藤健一さんという方が編年をやっておりまして、その編年に照らし合わせますと、概ね第Ⅲ期の第2小期中葉から第3小期後葉ということで、実年代で言えばA.D.660年からA.D.700年、7世紀の後半に集中して、35年から40年くらいの時間幅に納まるものなんですね。つまり、この遺跡っていうのは、須恵器の年代観からすると、その数十年の間に作られた、ということが言えるわけです。ただ、第1ブロックの中はですね、合子状の杯身、高台の付かない杯身といった、7世紀の中頃まで遡る古いものまで含まれる、ということで若干古くて、上を見てもA.D.680年代くらいの実年代に納まるもので終わっている、と。一方、第4ブロックの中には、湖西編年で第4期に当たる、つまりA.D.700年代まで新しくなるものもあるという

ことです。そういったことからすると、展示の解説などではですね、『日本書紀』に書かれている天武天皇12（684）年の「白鳳の大地震」、これと連動する「伊豆嶋噴火」を神の働きと受け止め、鎮めのために中央から派遣された人々が祭祀を行った、などとあたかも一時のように説明はするんですけど、遺物相からすれば、40年くらいの年代幅があるんですね。勿論、今でも明治時代のお皿が家庭で使われていたりしますので、40年間ずっと営まれていたというわけではないですけども、ブロック毎に少しづつ時期が違ってくるのがわかっていますので、恐らく数年スパンくらいで祭祀遺跡が形成されていると思われます。遺跡がバックされたのがですね、承和5（838）年。神津島の天上山が噴火します。その火山灰が遺跡に乗っかっていますので、それより時代が新しくなることはありません。

遺物では、土師器の中に、近畿の研究者に見てもらうと8世紀の事例に似通っているんじゃないか、と指摘を受けるような問題のあるものがありますが、天上山の火山灰が、そうではないと証明しておりますので、やはりそれ以前のものになってくるのでしょうか。まあ、これが、和泉浜遺跡C地点の状況でありまして、お話しました遺物については、展示しておりますので、また後でじっくりと見て頂きたいと思います。

それから、『続日本紀』などに、この時代のことについて記述があるということを言い忘れていましたが、『続日本紀』の文武天皇3（699）年ですね。伊豆は遠流の地ですが、修験道を始めたことで有名な役小角という方が配流されました。正史の上でもですね、そういった事実が確認できるわけです。

続く8世紀を代表する遺跡として、式根島の吹之江遺跡が挙げられます。式根島っていうのは、火山性ではなくて、隆起した平坦な島でありまして、その突端、縁辺部に遺跡が位置しております。非常に見晴らしの良い所にあります。そこに、古代の国家的な祭祀と思われる痕跡がある。湖西の須恵器であるとか、武器・武具類などが、整然と、ずらりと。鉄矛などは、並んで出てきている。これは、本学の吉田恵二先生が調査されてですね、遺物は現地に返却してあるので展示はしていないのですが、鉄の鏡といった珍しいものも出てきてましてですね、分析してみますと、近江ですとか、近畿地方の鉄が使われているといった所見が示されています。

で、この遺跡に隣接して野伏西遺跡というのがありまして、海獣葡萄鏡を伴っているんですね。海獣葡萄鏡というのは、8世紀、唐のものがオリジナルで、有名な高松塚古墳にも入っていたものです。これを、日本で踏み返したものは、だいたい20面ちょっとあるんですが、奈良・大阪・京都・滋賀の辺りに集中しておりまして、近畿地方からの出土が6割。日本海側に行きますと、石川県の寺家遺跡であるとか、能登半島の突端に舩倉島という小さな島がありますけれども、そこで出ています。あとは、太平洋側にですね、伊勢の神島、それから伊豆諸島の野伏西遺跡、房総でも少し出ている、ということで、だいたい東へ向いてこれが流れてくる。ということでありまして、やはり朝廷の東国支配と、祭祀遺物、特に海獣葡萄鏡の動きが一連となっている、と理解できるのでは、と思っています。それで、野伏西遺跡の海獣葡萄鏡は、非常に立派でしてね、小型海獣葡萄鏡といって5cmから6cmの小さい径のものが結構多いんですけども、これは10cmを超える大きな堂々たるものですね。こういったものが、重要なマツリの道具として、ここに配置されている、というのは大変意義のあることだと思います。そんな所でしょうか。

深澤 ありがとうございます。今お話頂きましたようにですね、非在地的な金属製品ですとか、鏡ですとか武器・武具、まあ須恵器もそうですが、こういったものが7世紀後半、天武朝の段階でセットとして島々に入ってきている、というのは、大変な驚きですね。映像の方でもご覧になったかと思いますが、最近、三



内川 隆志

宅島でも富賀神社裏の富賀浜で、奈良三彩が採集されたそうです。僕も、三宅島郷土資料館に展示されているものを拝見してビックリしたんですが、伊豆諸島が国家によって大変重視された地域なんだな、ということが、発掘調査の成果などから見えてきたのではないかな、と思います。

Ⅲ. 伊豆半島・諸島の中世信仰

(1) 伊豆諸島の信仰と黒潮文化

深澤 ところで、なぜ、こういった島々が国家から重視されたのか、ということについては、後で三橋先生からお話があることかと思いますが、古代国家から重視されてきた伊豆諸島のマツリが、中世、そして近世へと時代を追っていくに従って、どう変貌を遂げていくのか。或いは、どのような在地的な展開を遂げていくのか。こういった問題が、伊豆といった狭い世界だけではなくて、列島を広く見通した中で、如何なる位置付けになるのか、ということにつきまして、引き続き内川先生からお話を頂けたらと思うんですけども。

内川 今、吹之江遺跡の話をしたんですが、この当時に関わる法令や文献を見てみますと、亀卜をする卜部が、伊豆から中央の神祇官に任用されていたという事実があります。各地から任用されたのは、伊豆5人、壱岐5人、そして対馬10人。この3地域の人たちが、亀卜に優れていると認識されていた、ということでした、やはり伊豆は、中央から一目置かれていた地域であった、ということでもあります。

こういった、古代から続いていく伊豆の信仰でありますけれども、中世になると一層活性化します。特に、12世紀になると、伊豆諸島の遺跡が相当な濃密さを見せてきます。この辺の、時代的な背景っていうのは良くわかりませんが、12世紀に先立つ11世紀には、永承7(1052)年が末法元年などと言われたり、藤原道長が寛弘4(1007)年に金峯山に経塚を造営したりと、宗教的に大きな画期がありました。

また、12世紀は、乱世の時代でもありますね。半ばには、保元・平治の乱があり、社会不安が拡大する、というようなこともありますね。それから、都の中ですね、死者が急増している、と。これは、勝田至さんという方が『死者たちの中世』という著作を書いておられますけれど、その巻末に「中世京都死体遺棄年表」という不気味な年表があるんです(笑)。その年表を見ますとですね、都の中、死体だらけだったみたいですね。五体不具穢と言って、死体を犬やら、鳶やらが啜えて、あっちこっちへ落していく。貴族の家に落ちると、これを穢れだと言って、外出を7日間慎む、といったことが頻出する、といったことが文献に出てくるんですね。大体1180年から20年間くらいを見てみると、こんな記録が五十数件あるんですね。それ以前は、そんなに無い。13世紀になると、もう一気に無くなってくる、ということで、勝田さんは死体の処理の仕方が、制度的に整えられたから遺体が街から無くなったんだ、というような言い方もされているんですけど、やはり圧倒的に死体が多かったということに起因しているんだと思うんです。そういう都の状況を鑑みますと、新型インフルエンザではありませんけれども、恐らく疫病のようなものが流行ったのかもしれないですね。そんな状況があった。

それから、丁度その頃に、泣きっ面に蜂のような状況で、都で大地震が起こるんですね。琵琶湖西岸でマグニチュード7.5、という非常に大きな地震で、都も大きな被害を受けました。有名な西浅井町の塩津港遺跡でも、幸か不幸か、地震のお陰で有機物が残っていて、学術的に注目されています。まあ、そういった社会的背景がある。

都の実情が、そんなことですから、やはり信仰に頼る、ということで。後に「蟻の熊野参り」と言われたように、都の人々による熊野信仰も盛んになります。そして、そんな熊野信仰は、徐々に東へ東へと展開していきます。例えば、山形県の羽黒、羽黒山の御手洗池ですが、池の中に鏡を大量に投入しているんですね。ある研究者に言わせれば、そんな都の状況ですから、鏡を修験者に託して、羽黒で祈願したんだ、ということになるんです。そのルートとして考えられるのは、やはり熊野を中心とした修験者たちが、東へ、ということですね。その証ではありませんが、宮城県の名取市に熊野那智神社というのがありますが、そこには熊野関係の直接的な遺物、鏡であるとか、懸仏であるとか、そういったものが大量にあるんですね。です

から私は、都から日本海ルートで行ったのではなくて、熊野を経由した太平洋ルートで入っているんじゃないかな、という推察をしています。

その途中にあるのが、伊豆の島々であります。こういう歴史的な状況がありますから、鏡などの宗教的な遺物が大量に持ち込まれて、三宅を中心とした島々の神に祈念する、といったことが行われたんじゃないかと。12世紀に遺跡が急増するということの背景には、こういったことがあるんじゃないかと。

ただ、12世紀に遡るような遺跡として、例えば伊豆大島の和泉浜B遺跡が挙げられます。渥美半島で焼かれた大きな甕が出ていますが、これは恐らく、伊勢の大湊に運ばれて、そこから太平洋航路で運ばれたのでしょう。それから、渥美の甕っていうのは、伊豆半島・伊豆諸島に大量にあるんですね。大きな指標となる遺物の一つですね。また、伊勢も経由している、ということで、伊勢信仰や、伊勢神宮が御厨を営むような動きとの絡みもあったんじゃないか、と思います。

それで、伊豆諸島っていうのは、昔から鏡が沢山出土することでも知られております。明治大学の後藤守一先生が、昭和31（1956）年に三宅島の積石塚から鏡を発掘したのですが、その実態は、以後何十年もサッパリわからなかったんですね。ところが、私たちが利島の堂山神社を調査しまして、初めて、というか2回目ですが、鏡を伴う遺構が確認できました。ただ、ここは土の堆積が非常に薄かったので、遺物が混在しておりまして、時期的な問題がなかなか解決しにくい遺跡だったわけですが、遺物相からすれば12世紀の終わりの鏡が入っている。遺物も、そこに遡るものが出ています。ということで、これを切っ掛けに伊豆諸島の本格的な調査に進んでいったわけでありまして。この堂山神社は、明治初年に合祀されたものでありまして、実は深澤さんの方で研究されて、本来ここには薬師堂、お薬師さんを祀ったお堂があった、ということで、薬師信仰が根付いていたと。後ほど、そういった話に展開するかと思いますけれども、まさに、そこに鏡を伴う、集石を伴う遺構があったということでありまして。

同じ利島では、阿豆佐和気命神社の境内祭祀遺跡があります。この神社は、里宮と呼ばれております。要するに、集落の中にあるということで。一方、本宮は、宮塚山の上の方にあるんです。それが何時の時代にか遷座してですね、里の方に移されたのがこちらだ、という言われ方をしていたんですが、我々が里宮の方を調査しまして、偶然にも集石を発見して、遺物が混在しているぞ、っていうことで、本当に猫の額のような場所ですけど、そこをピンポイント的に掘ってみました。そうすると、石が群在していたんですね。上から順番に剥いでいきますと、小さな石の祠がズラリと並んだような状態で出てきました。その形成時期が、12世紀後半ということでありまして。石のお社を含んで、その中に大量の鏡、或いは儀鏡という銅板を丸く切ったり、四角く切ったものを無造作に放り投げている、というような状態でありまして。仏教的な色彩はなく、全国的に見ても発掘例の無いものでして、非常に良い状態で調査できたと考えております。今も、遺構の並びの少し手前の所に、同じ方向で木製の境内社が並んでいます。これは、位置的にもですね、同じような意味合いのものではなかろうかと、そういうふうに考えております。積石遺構には大量の遺物が入っておりまして、器種構成で言えば、壺・甕・播鉢が中心です。33面の鏡は、全部展示しております。とにかく、伊豆諸島の神々には、鏡が付き物だ、ということですね。これで、いよいよ実証できたな、と。

遺物量については、12世紀と15世紀に大きなピークがあります。その間、13世紀から14世紀の頭にかけては、比較的遺物量が少ない。その理由は、良くわからないですけど、やはり信仰そのものが弱体化したとか、低調になった時期である、と言えると思うんですね。それがまた、14世紀の終わりから15世紀にかけて復活する、というのはですね、私は、やはり伊豆の噴火と関係すると思っていてですね。応仁3（1469）年に三宅島の伊ヶ谷という場所が315年振りに噴火し、御神火が見られたということで、三嶋神の再臨と言いましょ、そういう形で再び信仰の眼差しが向けられた、という状況が反映されているのではないかと思います。その時代、ご存知のように、都が焦土と化し、社会不安が拡大した応仁の乱がありましたね。そういったことも、島の大神に帰依しようとする行為の要因にあったのではなかろうか、と思っています。15世紀というのは、物流が盛んな時期でありましてですね、物凄い数の遺物がここからも出ているんです。自

ずと、利島は、神奈備型の良い形をしていますから、船による海運に携わる人たちが、海のランドマークとして航海の安全を祈る、といったような個別の信仰の仕方もあったんじゃないかなろうか。そういうことで、日常生活雑器まで、どんどん上げられている。そういう状況が見て取れるわけです。

それから、これも同じ利島の八幡神社境内祭祀遺跡。社殿の建て替えで、調査は非常に小規模ですけども、早稲田大学の谷川章雄先生が調査されました。同じように鏡を伴う、集石を伴う遺跡。利島だけで、これだけの鏡と遺物が出ている。驚くべき実態が、この20年の間に明らかになってきたわけですね。

それと、後ほど話のある三宅島ですね。特に、三嶋大神の中心的な島である三宅島ですが、ここにはですね、総数100基を超える積石塚が造営されております。三宅島は、伊豆・神着・坪田・阿古・伊ヶ谷という集落によって形成されていますけれども、それぞれの地域に積石塚がある。立地的に見ると、集落の中心に近い所にあるもの、少し離れた高台のような所にあるもの、それから沢伝いの人里離れたような所にあるもの、といった傾向がありますが、時期的に良くわからない部分が多いですね。つまり、遺物を伴う塚っていうのが、非常に少ないんです。先ほど触れました、明治大学の後藤先生が掘られました坪田中郷積石には、鏡が伴っておりますけれども。また、この周辺の積石では、14世紀から15世紀に属する常滑の甕の破片などが伴っているんですが、多くは良くわからない。性格も良くわからない。本学の吉田先生が、文学部の考古学実習で20年来調査してきた物見処遺跡というのがあり、出土した墨書礫も展示しておりますが、立派な塚なんですね。周溝を伴った集石があるんですが、中心を掘っても物が出ない。礫石経塚といって、石に文字を書いたものが出てくる。そういう状況です。土壙を伴わないので、墓でもなさそうだ、と。このように、未だ不明なところも多いんです。

ただ私は、多くの集石っていうのは、お墓ではないかと思っています。静岡県の磐田市にあった一の谷中世墓群では、1,200基以上の墓が見つかっており、幾つかのパターンに分類できるんですが、多くは石を伴う礫石墓なんですね。まあ、そういった意味からすれば、これに非常に近いものがある。集合をなしている、という状況からも、そういう性格のものが多くないかな、と思います。

まあ、いずれにせよ、こういった積石に鏡を伴うものがある、ということに関係して言えば、家々に祀られている屋敷神というのがあるんですね。文字通り、個人のお宅で祀っているんですけど、やはり多くは、石を積んだり、石を立てたりですね、その前に小さな祠を作ったりして。その屋敷神の中からも、鏡が出てくることがあります。三宅島の伊豆地区にあります屋敷神では、祠に平安時代の鏡が入っていたりするんですね。驚くべきことです。まあ、とにかく、あちこちに鏡がある、と。総数から言えば、現在確認されているだけで100面近いのですが、過去には、もっともっと沢山の鏡があったらろうと思います。

それから、三宅島には、延喜式内社が集中しておりますけれども、それ以外にも地区毎に様々な神社があり、特に、坪田地区の二宮神社には多くの鏡が納められていますね。これは、近くの魔王神社境内から出土した18面を含んでおります。それに、伊豆地区の神沢神社では、33面の鏡がありました。集積地として、神社が鏡を保管しているんです。それらの出方は、良くわからないですけども、利島の先ほどの例からすればですね、ああいった出方をしたものが神社に奉納されていた、と。恐らく、そういう状況があったんじゃないかなろうか、と思われるわけです。やはり、利島と違って、どんどん土地利用の様子も変わっていく。ということで、良くわからなくなっていくんだと思うんですけど、鏡の年代観からすれば、やはり同じような状況が推測されるわけであります。

三宅島のすぐ南にある御蔵島ですが、こちらでも考古学資料館で調査しました。積石というか、むしろ石組のようなものが集中する地点がありまして、神ノ尾遺跡と呼んでいるんですが、これも遺物が伴わないんですね。甕はあるんですが、これは完全にお墓ですね。中から骨が出てきて、分析したら、高齢の女性の遺骨だったということ。

まあ、伊豆の中世には、限られたエリアに独特の、と言って良いのか、たまたま残っているとすれば良いのかわかりませんが、ここで見てきたような状況が残っているんですね。日本列島を見渡せば、鏡も大量に

残っていますんで、我々に小窓を開けて、昔の様子を見せてくれているのかもしれませんが。鏡を使った祭祀というのは連綿と続き、八丈小島の例ですと、鳥打遺跡や宇津木遺跡があります。明治時代になると、ガラス鏡まで用いています。伊豆諸島全体の鏡を見ますと、12世紀の後半から14世紀の後半、14世紀の終わりから15世紀という、二つの大きな山があるのですが、神さまには鏡、という思考が、ずっと続いている、という状況が見て取れるかと思います。

深澤 ありがとうございます。今お話を頂戴したようにですね、伊豆諸島の在地的な形成されてくる一つの画期、契機は、12世紀くらいにあるんじゃないか、と。その背景には、当時の社会不安ですとか、災害であるとか、そういったものが関わってくるのではないかと。このような問題については、また三橋先生のお話とも関わってくると思うんですけども。そしてまた、考古学的な資料を見ているとですね、列島のモノの移動。モノが移動する、ということは、当然のように思想も移動していく可能性がある、ということになるのかと思いますけれど、そういった中で島々の文化も形成されてきたのではないかと。

で、もう一つ大事なポイントっていうのは、島々ではですね、石ですね。石塚であるとか、石神ですよね。シャクジンと言っても良いかと思いますが、そういう信仰。それと、鏡の信仰。こういったものが相当に色濃いです。そういう中で、三嶋さん、三嶋大明神のまつりと、その本地であるところのお薬師さん、薬師仏の信仰も、底流に流れているのではないかと、思うわけですね。

と、このような問題について触れて頂いたわけですが、内川先生からの御指摘にもあったように、12世紀が一つの画期になるんだ、ということですね。そこで、内川先生からは、横軸、空間軸で、汎列島の動向の中での話を含めて頂いたわけですが、今度はですね、旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世・近代・現代といった長いスパンで、縦軸、時間軸で見て、伊豆の信仰を捉えてみる、といった方向性で、ちょっと時間が押していて恐縮なんですけれども、笹生先生にお話をお願い致します。

(2) 日本宗教史の画期

笹生 時間も押しているということで、掻い摘んでお話をさせていただきます。まあ、宗教史的な画期と言うことで、普通、学校で歴史の話をする時は、縄文・弥生・古墳・奈良・平安、という時代区分をして考えていくことが多いと思います。実は私、色々な遺跡の調査を担当する中で、特に南関東における集落の立地、それから集落の周辺の土地利用の在り方を総合して見てみると、単純に弥生・古墳・奈良・平安、というふうには区切れない。

むしろですね、中世まで見通した見方をすると、弥生時代中期の後半ですから、B.C.1世紀くらいになるかもしれませんが、それから古墳時代前期、A.D.4世紀頃までを1段階。そして集落や土地利用、古墳の立地を含めてですけども、5世紀から9世紀頃までが一つの同じ景観が続く2段階。8世紀には奈良の都ができますけれども、田舎では、集落景観はそう大きくは変わってこない。むしろ大きく変わるのは、平安時代中頃の10世紀頃です。そして、10世紀頃から、ある意味では集落の姿が見えなくなって、その後、明確に見えるようになってくるのが、お墓もそうなんですけど、実は、今日のお話しに出てきた12世紀。この時期が、景観的にも大きな画期です。古代の集落が10世紀に見えなくなる。部分的に11世紀まで残ってくるものはあるんですけど、それがもう一回、屋敷という形で明確になってきたり、土壙墓、経塚などを伴いながら、新たな景観として形成されてくる。そういう画期が、大体12世紀くらいにある。これは、幾つかの事例を見ても明確で、今日の話とも一致してくる話です。

これは、日本の宗教史の画期とも一致してくるのではないかと、考えています。例えば第1段階、弥生時代の後半から、古墳時代前半。この時期は、鏡や玉・剣を、かなり意識したり、場合によっては、弥生時代の末頃から武器や農具をお墓に供えたりする。これは、そのまま古墳時代の副葬品に繋がってくるわけです。それが、第2段階の5世紀頃を境にして、朝鮮半島からの新しい影響を受けながら、恐らく統一した祭祀が導入され、律令期に繋がってくる神信仰が形成される。この辺りの細かい実証は、今日は省略しますが、それが、最終的に纏められていくのが『延喜式』、と私は考えています。

『延喜式』というのは、まさにNHKが滅びゆく民俗行事を映像化して残していく、といったものと同じような形で、忘れ去られつつある古代の祭祀の姿を克明に記録していく、というものではなかったかと思っていますが、この後、地方も含めてですね、古代的な景観が一斉に変化していく。古代の集落が、姿を消してしまうんですね。それが、再び姿を現すのが12世紀。その時に、どういうことが起きるか。例えば、沖ノ島の祭祀遺跡や、静岡県浜松市の天白磐座遺跡では、古代の祭場に経塚を作る。そこで今度は、仏教的な内容を含めて、古代の祭場が復活してくる。また、古代に隆盛を極めたお寺は、国分寺を含めて、10世紀、11世紀に衰退していく。そこにまた、12世紀頃から経塚を作り、復興してくる。このように12世紀は、10世紀を画期として変化した古代の信仰の場が、中世的に再出発していく大きな起点になっている。このように見てくると、先ほどの内川先生の話も、かなり一致してくる。

最後に、どのように古代と比べて大きく変わるかについて話したいと思います。古代の神様と言うのは、どちらかと言うと地域の神様。国家規模の祭祀もありますけれど、国単位、地域単位のお祭りが重要でした。ところが、この段階、特に12世紀以降になってくると、先ほど御厨の話が出ておりましたけれど、東国ですと相模国大庭御厨の事件を記した『天養記』の記述には、熊野の話、伊勢の荒木田の神主さんが大庭御厨まで来ていることが書かれている。もう一つ、12世紀の『長寛勘文』を見ても、甲斐国に熊野社の荘園ができている。そのような形で、神社毎に広域の信仰圏が形成されている。それと一緒に仏教的な要素。後で、三橋先生から、薬師や熊野の話も絡めてお話頂けるのではないかと思います。そのような広域の信仰圏が、さらに仏教や陰陽道的な要素と組織的に融合して形成されてくる。それが、広い目で見たと12世紀の画期の、日本宗教史の中で見た意味になってくるのではないかと、私は考えます。以上で宜しいでしょうか。

深澤 ありがとうございます。今お話にありましたように、祭祀遺跡だけではなくてですね、集落も含めた総合的な景観を見直してみると、やはり12世紀っていうのが一つの大きな画期になってくる、ということで理解できると思います。一方ですね、このようにマツリが展開していく時期の、まあ少し前後するんですが、ほぼ同時代的な史料ですね。考古資料っていうのは、非常に生々しいものを伝えてくれるのですが、それは、それだけでは語ってこない部分があります。

Ⅳ. 三嶋神・三嶋大明神と伊豆のマツリ

深澤 そういった意味でですね、伊豆・伊豆諸島のマツリの実態を、如実に反映しているであろう『三嶋大明神縁起』、通称『三宅記』というものがあるわけですが、当然のように、縁起物ですから、縁起物一般に見られるようなモチーフっていうのも描かれている一方、地域的な事情も多分に含まれているであろう、と。そんなことも合わせましてですね、三橋先生の方から、『三嶋大明神縁起』とは何か、そこから読み取れるものは何か、といったような観点からお話を頂きたいと思います。

三橋 はい。皆さんのお手許に、深澤さんが抄出してくださった『三嶋大明神縁起』が届いているかと思います。それをお読み下されば、おおよその内容がお分かりいただけると思います。深澤さんがお話下さいましたように、この縁起は、一般には『三宅記』と呼ばれています。あるいは『三宅旧記』・『三宅神記』などとも言っております。このような通称で呼ばれるのは三宅島が中心になっているからなのです。そこで、私も以下においては『三宅記』と呼ぶことにします。

私が『三宅記』と初めて出会ったのは、もう30有余年も前のことで、すでに記憶もあいまいになっております。そのころ、私は三宅島の式内社の調査をしておりました。あの小さな島に式内社に比定される神社が何と十三社もあるというのです。ある日のこと、累代、三宅島の神主兼島役人をつとめてきた壬生家の文書を見ていましたら、『三嶋大明神縁起』と題する巻物と出会いました。もとは神着の御笏神社のご内陣に納められていたもので、「他見を許さず」ということで誰にも見せなかったというのです。このような例は壬生家本だけではありません。寛政3（1791）年になった秋山章の『南方海島志』によれば、三宅島の薬師堂には『旧記』1巻が納められていたとあります。この『旧記』は『三宅記』であると思います。また、亡く

なりましたが、土岐昌訓先生から聞いた話ですが、大島の波布比咩神社のご内陣にも『三宅記』の写本が納められているということでした。このように『三宅記』は伊豆諸島の人たちにとって神様のように大切なものだということが分かります。

しかし、読んでいきますと、意味の通じないところが出てきます。そのころ、すでに印刷された『三宅記』もいくつかありましたが、それらを見ても読めないのです。それでテキスト・クリティック（本文批判）をする必要があると思いました。出来る限りの異本を集めて一字一句を比較研究して、原典に近い最良の本文を定めるべきと考えました。

すると、新島の前田家に2本、下田の白浜神社の原家に3本、あるいは内閣文庫に2本、無窮会神習文庫にもあるということで、次々と出てきて、当時、確か11本の写本が集まりました。さらに実際に見ていませんが、ほかに13本の写本が存在することもわかりましたが、とりあえず、集まったもので比較してみたのです。それが『國學院大學紀要』第16号に発表した「三嶋大明神縁起」(1978年)であります。もう30年以上も前のことですので、いま読み返してみると杜撰なもので、訂正を必要とするところが少なくありません。ただ、述べてきましたような研究態度は誤っていないと思います。というのは、テキスト・クリティックをすることにより、これまで意味の通じなかったところが読めるようになったのです。その後、昭和55(1980)年に、『神道大系』神社編(駿河・伊豆・甲斐・相模國)のなかに、国立公文書館内閣文庫所蔵本と無窮会神習文庫所蔵本の『三宅記』を収めてありますが、失礼ながら、校訂が十分とはいえず、意味の通じないところが少なくありません。私が校訂したものの方が、良いのではないかと自負しています。

いささか横道にそれますが、当時、千葉大学で歴史地理学を専攻されていた森谷ひろみさんも大場先生の神道考古学を聴講しに来ていました。あるとき、森谷さんに『三宅記』のことを話したところ、たいそう興味を持ち、それから一緒に三宅島の式内社の調査をすることになりました。森谷さんは歴史地理学の立場から式内社を調査しました。とても熱心で、しかも勇気のある方で、島の人たちから禁じられていた「入らずの森」などにも一人で入って行き調査をして、後に『式内社の歴史地理学的研究—安房国・伊豆国三宅島の場合』(1977年)という大著を刊行しました。また、後に「『三宅記』に載る『八王子』の神社について」(1974年)という論文も書いています。森谷さんは後に千葉大学名誉教授となられた神尾明正先生といつも一緒で、お二人とも大きなリックを背負っておられたのが印象的でした。神尾先生は本学でも教壇に立っておられました。白髪の美しい先生で「坊がつる讃歌」の作詞者として一躍全国に名前を知られるようになりました。

残念なことに、森谷さんは大著が出版される前に夭折しました。ほんとうに惜しいことでしたが、あのとき、森谷さんが「『三宅記』は三宅島の歴史地理の研究に役立つ」と言っていたことが思い出されます。つまり、『三宅記』は歴史地理学にとっても貴重な文献資料だということですから、考古学にとっても参考になるものと確信いたします。

ところで、私は『三嶋大明神縁起』と書きましたが、一般には『三宅記』あるいは『三宅旧記』・『三宅神記』とも言っています。また『みやけ嶋薬師縁起』・『三宅嶋薬師縁起』、あるいは『嶋々御縁起』・『嶋々神社御縁起』・『三嶋白浜嶋々大明神御縁起』、また『伊古奈比咩命社記』・『白浜大明神縁起』と表題した写本もあります。「三宅」の名は、この縁起が三宅島を中心に述べていることによるもの、また「嶋々」とは、いうまでもなく伊豆諸島のことです。「三嶋大明神」の「三嶋」も「御嶋」という意味で、「嶋々」を尊称したものと思います。つまり伊豆諸島は三嶋大明神の誓願により、龍神や火雷神や水神たちの協力のもとに造られた島々ですので、これを尊んで「御島」と称したのではないのでしょうか。あるいは、いま突然ひらめいたのですが、龍神たちが大きな石を三ツ置いて、それを火雷神に焼かせて嶋を造ったと書いてありますから「三島」といわれたともいえますね。それはともかく、次に『三宅嶋薬師縁起』という言い方ですが、これは薬師が三嶋大明神の本地仏ということによるものなのです。したがって、『三宅記』は本地物の一種であるといえます。三宅島だけでなく、伊豆諸島には、どの島にも薬師様がまつられています。それは三嶋大明神の本地だからです。三宅島の場合は、伊豆地区の薬師堂（東光山満願寺）に安置されていますが、私が訪れた30数年前は、

薬師堂は朽ち果てていました。その後、立派に再建されました。平成21（2009）年8月に、当センターの考古学の皆さんが調査をしたところによれば、この薬師堂の境内で積石遺構を確認したということでした（『伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号）。あの薬師堂の本尊の木造の薬師如来座像は、江戸時代の作ですが、平安時代の旧像の一部が内部に納められているほか、両手首などは旧像のものを使用しているということです。また、『伊古奈比咩命社記』の伊古奈比咩命神社は下田市白浜にある神社で、通称、白浜神社といえます。『三宅記』には、白浜に住む龍神が海底より石を上げてきて、その石を火神が焼いて島を造ったとあり、下田の白浜は伊豆半島にとって大切な場所なのです。したがって、白浜神社には『三宅記』の写本が2本伝えられています。

また、『三宅記』には、火山噴火の様子を実によく観察して記してあります。火山の噴火によって島が生まれる事を「神々の島焼き」といっていますが、例えば、「龍神をたのミて、海中に大きななる石を三ツおきたまハ、火の神やかせ給へ、そのまゝ嶋と成へしとて、そのことくにこしらへ、水火の雷、一日一夜にやき給へは、一嶋出現しぬれは」とあり、また「龍神、海底より、又、石を上給へは、神たち此石をとりて、一所につミおき給へは、火神これをやきたまひ、又、一嶋出現せり」と記しています。このように龍神が海底より石を上げ、それを水火の雷神が一日一夜焼いて一つの島が生まれたとあります。これは海底火山の噴火の様子を文学的に表現したものであります。ちなみに、「神代紀」上に、対馬や壱岐、そして所々の小島は、「皆是潮（海水）の沫（泡）の凝りて成れるものなり」と記していますが、これなども日本の小さな島々は海底火山の噴火で生まれたことを彷彿させる記述です。

次に陸上での火山噴火ですが、それを『三宅記』は「島の上に、大に穴をほり、また、さきのことく、龍神たち、海底より大きな石を、その穴へもちこひたまへは、水火の雷、是をやき給ふ時、石もやかれて湯となり、わきあかりぬる所へ、沖の浪うちかけぬれは、すなはち、岩とも石とも成りて、もとの嶋三ヶ二はかりもひろくなり、云々」と記しています。この場合も、龍神たちが海底から大きな石を火口まで持ち運んでくると見ていますね。つまり、これは地殻の深部にあるマグマが地表に噴火する様子を述べたところなのです。

ついでに申しますと、三宅島では、溶岩を「流れ」といっています。溶岩は神々の世界から来たものということで神聖なものとしてお祭ります。これを「流れ勧請」といいますが、なかには「流れ観音」という人もいます。これは「勧請」と「観音」が混同したのですが、事実、私が坪田で見たのは観音のかたちの溶岩で、それが御神体となっていました。言うまでもなく、三宅島の火山噴火は活発であり、「三宅島」は「御焼（ミヤケ）島」ともいわれます。つまり、火山噴火により出来た島だということです。最近では平成12（2000）年に大きな噴火がありました。その活動は現在も続いているわけです。古くは、火山噴火のたびごとに新しく神様が勧請されました。これが「流れ勧請」ですが、このようなことで、三宅島には式内社をはじめ多くの神社が鎮座しているのだと思います。

また、島々では噴火口から噴き出したマグマが海へ流れ込むことが多く、そのときの様子を『三宅記』に「沖の浪うちかけぬれは、すなはち、岩とも石とも成りて」と記しています。沖から押し寄せる波が、絶え間なく溶岩に打ちかかり、そこで湯がわき上がり、溶岩は次第に固まって岩や石となり、広い大地となったと記してあります。

このように伊豆諸島の造成は、火山噴火だけでなく、沖から押し寄せる波、いわば常世の頻浪の恩恵も忘れてはならないのであります。つまり龍神、そして水火の雷神たちの働きにより島々が造成されたと記しています。ちなみに、天武紀13（684）年10月14日の条に、この日の夕方、東方に鼓を打つような音が聞こえたとあり、これは伊豆島、恐らく大島のことだと思いますが、その島の西北の土地が自然に300余丈広まり、さらに一つの島ができたとあります。興味深いのは、鼓の音、これは火山噴火のときの音をこのように表現したものと思いますが、その鼓の音を「神の是の嶋を造る響きなり」と記していることです。大島には世界にも数少ない火山専門の伊豆大島火山博物館があります。昭和61（1986）年の三原山の噴火を機会として開

館したもので、当時の三原山噴火の様子映像をはじめ、国内外の火山に関する資料が数多く展示されています。したがって、大島の人々は火山噴火のメカニズムを知っていますが、それでも、朝起きると、必ず三原山に向かって手を合わせて拝んでいる人もおります。火山の噴煙を「御神火」と神聖視し、噴火口を「御釜」または「御穴（みそど）」、火山灰を「御灰」と尊称し、火山噴火は神のなせる業とする思想は現在も生きているのです。

さて、『三宅記』には、第6代孝安天皇21年から神々が伊豆の島々を焼き始めたことあり、七日七夜に十の島々を焼き出したと記してあります。また三嶋大明神は各島に名前を付け、第一は「初めの島」、これは初島、第二は「神あつめ島」、恐らく神集島だと思います。第三は「大嶋」、これは大島ですね。そして第四は「あたら島」すなわち新島、そして第五は「三宅島」、第六は「御倉島」と書いてありますが、これは現在の御蔵島、第七の「おきの島」は八丈島でしょう。「おき」は「遠く隔たったところ」という意味です。ちなみに八丈島で教員をしていた友人から「おきで見たときゃ鬼島と見たが、八丈来てみりゃ夢の島」という民謡を聞いたことがあります。次に第八に「小嶋」とあるのは八丈小島、第九の「わうこ島」は青ヶ島と考えられます。そして最後の第十「としま」、これは利島ですね。ここで補説しておきたいのは、第九の「わうこ島」で、近藤富蔵の『八丈実記』に「青島」は「男島（おのしま）」・「おふの島」・「葦島」・「鬼ヶ島」ともいうと記しています。「わう」・「おふ」は「青」で、「青島」は宮崎や京都など全国各地に見える島で「常世」を意味していると思われます。このように『三宅記』には、伊豆諸島の創成神話が語られております。だから、伊豆の島々に住む人々にとっては、『三宅記』は『古事記』のような書であるといえます。

さて、島々が造成されると、三嶋大明神は三宅島に宮を造ります。また、大明神には5人の妃がいましたが、それらの妃たちを各島々に配置するようにと、大明神の伴として従っていた見目と若宮に命じられます。そこで、見目と若宮は、大島に「はふの太后」を、新島に「みちのくの大后」を、神集島に「長浜の御前」を、三宅島に「天地今宮妃」を、そして八丈島には「いなはゑの妃」を配置いたします。なお、それぞれの妃には多くの王子がいたことも記されています。それらをいちいち掲げると煩雑になりますので、ここでは三宅島の場合だけを簡単に述べておくことにいたします。

三宅島に配置した「天地今宮妃」には「あんねいこ」と「まんねひこ」という二人の王子がいたとあり、また「あんねいこ」を「飯王子」、「まんねひこ」を「酒の王子」ともいうと記しています。そこで母後の「天地今宮妃」ですが、この「天地今宮」の「今」は「分」の誤写であるとの説があります。それは「今」と「分」の草書体が似ていることから、「天地分宮」がいつのまにか「天地今宮」となったというものです。そして「天地分宮」は式内社の「阿米都和気命神社」にあたるといいます。栗田寛の『神祇志料』などは、阿米都和気命は阿古の富賀神社に祭られるとしています。詳しくは、私の調査した「阿米都和気命神社」の報告（『式内社調査報告』第10巻）をご覧ください。

次に「天地今宮妃」の二人の王子「あんねいこ」と「まんねひこ」について述べます。これらの王子が三宅島の何処に祭られているかを探してみたことがあります。すると神着湯ノ浜にある大久保神社に祭られていることが分かりました。この神社はもと大久保浜にありましたが、最近、といっても30年前の最近ですが、湯ノ浜に遷ったということでした。今はどうなっているのでしょうか。また明治18（1885）年の「社寺明細帳」には、大久保神社の末社として若宮神社・見目神社・剣宮神社、そして壬生神社が記載されています。『三宅記』によれば、若宮・見目・剣は老翁の子と記してあります。この老翁は「あまのこやねのみこと（天児



三橋 健

屋根尊)」というところあり、その後、老翁の3人の王子は三嶋大明神の陪従神となったとも記しています。また、最後の壬生神社には壬生家の祖神である壬生御館を祭っています。

なお、さきほども申したように、『三宅記』は本地垂迹思想を背景にしていますので、各神の本地仏も記してあります。それをまとめて掲げておきますと、天地今宮妃は聖観音、若宮は普賢菩薩、見目は女神で弁財天、剣宮は不動明王となります。

皆さんにお伝えしたいのは、『三宅記』に登場する神々が、現に今も島々に祭られているということです。「あんねいこ」とか「まんねひこ」などという、何だか御伽話にでてくるような名前に聞こえますので、すべてはフィクションのように思ってしまうのですが、実際に島々で聞き取り調査などをしてみますと、『三宅記』の神統譜には虚構が一つもないことがわかります。見目や若宮は今も三島大社の摂社として祭られておりますし、また末社として祭られる飯神社、酒神社は『三宅記』の「あんねいこ」・「まんねひこ」にあたると思われる。

さきほど『三宅記』は伊豆諸島の『古事記』のような書であると述べました。とくに島々の住民には心の支えとなってきた聖典であったといっても過言ではありません。そのようなことで、伊豆諸島には、どの島も『三宅記』を備えていたものと思います。つまり『三宅記』は伊豆諸島の住民には大切な書でしたので、なかにはすでにお話したように神社の内陣に納めることもあったのです。このようなことからしても「三宅記」は神様のような尊い存在であったことが分かります。

また、天竺（インド）から来た薬師如来の垂迹である三嶋大明神が、ほかの垂迹たち（日本在来の神々）を雇って、島々を広くするために焼き出したとあり、それを苦しいことだが、末代の人々のためであると記しています。つまり島々の造成は神々の苦しみによりなされたとの思想が見られます。

そして『三宅記』には、三嶋大明神から壬生御館、実秀、実正たちに教えた秘伝も記されています。それらは祭祀に関すること、忌服のこと、東舞と駿河舞の歌詞、亀卜の技法・占形図・釈文などです。なお、占形図には「とほかみゑみため」の文字を窺うことができます。これは亀卜を執り行う際の呪文であるといわれています。注目されるのは、伊豆に亀卜の技法に優れていた卜部が5人いたと『延喜臨時祭式』42条に記すことです。そのほか彦岐5人、多いのは対馬で10人いました。また、『卜部家系譜』に、卜部家は天兒屋命を遠祖とし、その11世の雷大臣命の時に卜部姓を賜り、18世の常磐大連公の時に中臣姓に改め、26世の日良麿の時に、もとの卜部姓に復したとあります。したがって日良麿を卜部氏の始祖とすることになりますが、この日良麿が『三代実録』元慶5（881）年12月5日の条に卒伝を載せる卜部宿禰平麻呂と同人ならば、平麻呂（日良麿）は伊豆国の出身で、幼くして亀卜道を習い、神祇官の卜部となり、75歳で亡くなったことになります。申し上げたいのは、その平麻呂が伊豆国の人だと記すことです。

なお、伊豆にいた5人の卜部ですが、これは島々に配置されていたものと思うのです。『三宅記』に三嶋大明神の妃が5人いたとあり、それらを大島、新島、神集島、三宅島、八丈島に配したとありますが、卜部の5人も半島よりも、これらの島々に住んでいたと考えられます。八丈島には近世まで亀卜が行われていたと聞いたこともあります。

ところで、現在、私どもが目にする『三宅記』の写本で、最も古い奥書をもつのは新島の前田家本です。奥書をそのまま記すと「文明拾三季六月五日書之」とあります。つまり室町後期の文明13（1481）年6月に書写されたものなのです。ちなみに前田家には宝永6（1709）年の奥書のある写本もあります。

なお、『三宅記』の成立については、今後、詳しく考証して見る必要がありますが、大ざっぱな言い方をすれば、室町時代に壬生家が中心となって編纂したものではないかと思っています。『三宅記』のいたるところで、壬生家は三嶋大明神の正統な御代官であることが強調されているからです。壬生家が『三宅記』の中心的な位置にあることは確かで、例えば、大明神は恒河川の川原の石の上にあらわれた薬師の御体を笏の中に入れ、肌守りのように肌身離さず持ち歩いていたが、それを「手しるし」として壬生実秀に渡したとあり、そのとき、この薬師の御体を「末の代ま迄も、伝へき也。ゆめへ奉公おろ（そ）かなるへからず」と

誓願しております。さらに実秀はその薬師の御体を実政に与えます。実政は537年後に日本へ帰ると言い残して行くえ不明となったと記しています。壬生家の系図は、管見に触れたのは5本ですが、それらを整理してみると信憑できないところもありますが、初代が美多知(御館)、そして実秀は2代、また実政を初代とする家系図もあり、実政の脇に「白鳳七年」と記してある系図もあります。

さて、時代が過ぎ、文武天皇の大宝元(701)年、壬生安正の時ですが、島々の妃や王子たちは、大明神の誓願のごとく、衆生済度のために、本地すなわち本来の姿を「石に写して」あらわれたと記してあります。「石に写して」とは石で造ってあらわしたことを意味します。このとき王子たちは皆、薬師としてあらわれます。また島々の妃たちも本地の姿をあらわします。本地が示されていますので掲げておきますと、大島の妃は千手観音、これは式内社の波布比咩命神社に比定されています。次の新島の「ミとの口の妃」は馬頭観音、この妃は式内社の久爾都比咩命神社に比定されており、現在は新島の属島である式根島に鎮座しています。次の神集島の妃は如意輪観音とあらわれます。これは式内社の阿波神社に比定されています。次の天地今宮の妃は聖観音、これについては前に述べましたので省略します。次の「いなはへの妃」も聖観音にあらわれたとありますが、これは八丈島の式内社の優波夷命神社に比定されています。そして「ゑかい妃」・「くはた妃」は女体とあらわれたとあります。

なお、これらの妃は箱根の芦ノ湖で釣りをしていた翁の娘たちです。実は翁にはもう1人「しとり」という名の娘がいました。つまり3人の娘がいたのです。いずれも大明神の妃として三宅島に祭られております。まず、長女の「ゑかい妃」は4人の王子がいましたが、新島の「ミとの口の妃」を妬み、幼い王子を抱いて「いかゐの海」に飛び込み、石神となって海中にいますとあります。王子たちのことは省略しますが、この「いかゐの海」とは、三宅島の伊豆の入海のこと、現在、伊ヶ谷の大船戸湾の入り口に祭られている神社が「ゑかい妃」を祭るといわれています。この神社は式内社の伊賀牟比咩命神社に比定されています。また次女の「くはた妃」には「うらミ子」と「二宮」という2人の王子がいました。この妃は坪田の海岸沿いにある峯に祭られたとあり、式内社の伊波乃比咩命神社に比定されています。そして三女の「しとり」ですが、この妃は神着に祭られ、8人の王子が一度に生まれたとありますから8つ子を生んだことになります。式内社の佐伎多麻比咩命神社に比定されています。なお、王子のことは省略してきましたが、やはり大事ですので「しとり」が一度に産んだ8王子たちのことは名前なりとも掲げて置くことにいたします。なお、括弧内に比定される式内社名を掲げておきま、
「なこ(南子神社)」・「かね(加禰命神社)」・「やす(夜須命神社)」・「てい(氏良命神社)」・「したひ(志理太[乎]宜神社)」・「くらゐ(久良恵命神社)」・「かたすけ(片菅命神社)」・「ひんすけ(波夜志命神社)」となります。

なお、話は前後しますが、さきほど三嶋大明神が川原の石の上にあらわれた薬師の御体を笏の中に入れ、それを大切に持ち歩き、壬生実秀に「手しるし」として渡し、「末の代ま迄も、伝へき也。ゆめへ奉公おろ(そ)かなるへからす」ということを述べましたが、この笏も三宅島に祭られているのではないかと思います。というのは、三宅島を調査していたとき、神着の御笏神社の御神体は長さ20センチほどの木製の古い笏であり、上部に小さい鏡をはめ込んであると聞いたことがあるからです。そのとき、私は柳田國男の『石神問答』を思い出し、御笏神社は御石神社ではないかとも考えました。当時、私は東京練馬の石神井に住んでいて、その地名が井戸を掘った折、石棒が出土したので、これを神として祭ったことから、石神の井となり、さらに石神井となったといわれております。現在この石棒は石神井神社の御神体として祭られていますが、その形は笏のようでもあります。そこで、三宅島の御笏神社の場合は、伝聞では「木製の古笏」ですが、『三宅記』の記述など、あれこれ考え合わせますと、やはり「石の笏」ではないかと思うのです。御笏は御石でないかと考えますね。つまり笏と石は音が通じ、また笏の形も石棒・石神に似ておりますから。私は御笏神社の御笏神は御石神ではないかと思ったこともあります。これは思い付きのような話ですが、『三宅記』に登場する神々の姿は、すべて「石を写して」とありますから、石神であることは確かです。これは、前に述べたように、「流れ勧請」と関係があると思います。つまり火山噴火で流れた溶岩を神として祭っ



深澤 太郎

た例が多く見られます。

ところで、話は前後しますが、『三宅記』に、三嶋大明神が若宮・見目、そして壬生御館に対して三宅島を4ヶ所に分け、そこに妃たちや王子たちの宮居（神社）を定めるようにと誓願したとあります。その4ヶ所とは、「神つき（神着）」・「いつ（伊豆）」・「あこ（阿古）」・「つはた（坪田）」であり、現在と同じです。

繰り返して述べて来たように、『三宅記』は、一見、御伽草子のような話ですが、単なる架空の物語ではなく、事実を文学的に表現したところも多いと思います。ただ、本地物には一つのパターンがありますから、そのパターンにそって読む必要があります。そうしないと理解できないところがあります。

例えば、日本の神々の多くは「三国霊行」といいまして、天竺・中国・日本の三国のあちこちを遍歴するのが常です。そのことを知っておかねばなりません。ここの三嶋大明神だけでなく、天照大神や八幡神や稲荷神や熊野の神なども同じことです。日本の神々を日本

固有ということだけで考えてしまうと、『三宅記』のような本地物は理解できなくなります。箱根権現や伊豆山権現も同じですね。天竺から遍歴しながら日本にやってきたとあります。そのことを知っていないと、例えば天照大神と第六天の魔王との契約、稲荷と弘法大師の契約などの説話の意味も理解できません。

『三宅記』の冒頭のところなどは、「熊野の本地」とそっくりですね。内容といい、モチーフといい、恐らく『三宅記』には「熊野の本地」の影響が認められます。恐らく黒潮に乗って熊野から伊豆にやってきたものと思います。有吉佐和子さんが御蔵島へ行き、あの島で何日か滞在して『海暗』という小説をお書きになっています。「海暗」とは御蔵島のことですが、実際に島に上がって三宅島の方を眺めてみると、海は真っ黒で、大河のように流れているのを見る事ができます。ですから三宅からくる船が黒潮に流されているのがわかります。

そういえば、白浜という地名は南紀にもあり、伊豆にも白浜があります。また千葉の安房郡にも白浜があるわけで、これらは黒潮に乗って運ばれた地名でしょうか。確かに伊豆の白浜神社の裏の浜の砂は、神社縁起にも「白浜の砂は雪よりも白し」と書いてありますように真っ白ですね。

『三宅記』に影響した熊野信仰は黒潮に乗ってきたといえます。熊野信仰を民間に広めた熊野比丘尼は白い椿の枝を持っております。精気のある椿の枝を折ると、ジクジクと唾液のような樹液がでますので、椿と唾とは共通します。椿は春と木を合わせて作った国字ですが、神聖な樹木です。熊野の神々のなかに「速玉」が祭られています。この「速玉」は唾のことです。伊耶那美命が伊耶那岐命と離縁したときに唾をはいたところ、その唾から生まれたのが速玉之男という神であると『日本書紀』第十の一書には書いてあります。ですから、椿の生い茂ったところに熊野神社が鎮座していることが多いのです。これは黒潮が椿の実を運んできた、換言すれば、それは熊野信仰を運んできたとも言えます。

「熊野の本地」だけでなく、例えば『宴曲』『三嶋詣』も『三宅記』と類似したところが見られます。まず「和光同塵は利物の謀」とはじまっているように、本地垂迹思想で語られています。そして「本地医王の誓約、十二大願を顕す」などとあります。「医王」は三嶋大明神の本地である薬師如来のことであり、また「十二大願」とは薬師が衆生を救済するために立てた十二の大願のことです。さらに三嶋大明神に従った「見目」や「飯酒王子」などの名も見えます。そして「阿遮一睨の眸」とある「阿遮」は不動のことですから、剣宮の本地であります。詳しくは省略しますが、この「三嶋詣」が『三宅記』に影響を及ぼしたものと考えられます。そのほか『神道集』の「三嶋之大明神之事」や「二所権現事」などとの比較、あるいは「箱根本地由来」など、幅広く中世神道物語と比較して、研究を進める必要があります。

余談になりますが、律令体制を基盤とした神道文献などは、頭の良いエリートの作ったもので、整然としていて間違いなどは少ないわけです。それらは貴族的と言うか。しかし、そのような神道文献からは諸国の庶民の心を容易に知ることができないわけですね。その点からすれば、『三宅記』は間違いも多いかもしれないけれども、名もなき民衆の神道を知る上でとても貴重だと思います。それは『三宅記』が民衆応護の神道のテキストだからです。

なんだか、年を取ると、同じことを繰り返すようになり、皆さんと違って前向きではなく、目玉が後ろを向いてしまいます。これくらいでお許しいただけるでしょうか（笑）。

深澤 ありがとうございます。最後に、三橋先生から我々の研究に対する示唆まで与えて頂くということになり、本当にありがとうございました。やっぱり、我々の科学的な合理性っていうような目で見てしまうと、却って目が曇ってしまうところがあるんだ、というふうに思いますね。やはり、当時の人々の考え方、いわば野生の思考に寄り添ってですね、我々も文書や考古資料に当たっていく必要があるんじゃないかな、という思いを新たにしたところでございます。

ところで、14世紀から15世紀くらいには『三宅記』も出来ていただろう、ということですが、不思議なことに、先ほどの内川先生のお話で、いっぱい遺構や遺物が出ていたはずの利島に関する記述が余り見られないんです。これ、三橋先生のお話にもありましたように、プレ段階なんだろう、というふうに思うんですね。『三宅記』には記録が無いんだけど、三嶋さんと、阿豆佐和気命のような御子神さんと、その両者の本地である堂山のお薬師さんをセットにしたマツリが、考古学的に確認できる。こういう構造っていうのは、どうも『三宅記』が成立する以前から広く伊豆の島々に伝えられてきた。もっと言えば、ここにお后さんと、その本地である観音さんの信仰が加わってくる場合もあるんですが、そういったような様相が見えるんじゃないかな、と。これまで調査してきた三宅島や、他の島々の様相を総合的に捉えると、今日に繋がる古い信仰の姿が、はっきりと見えてくる気がします。

V. 議論の総括

深澤 で、当初、1時間半から2時間ということで御案内しておいたんですけど、最大予定時間も15分ほどオーバーしてしまっただけで、これは、司会の、私の責任ではございますが、今日は本当に多くの皆さんにいらっしやっただけで、本当にありがとうございました。三宅島からは、ずうっとお世話になってきた筑波製材所の筑波さんまでお出でになって頂き、本当にありがとうございました。で、今日の話に関連しますと、サイバー大学の俵寛司先生がいらっしやっています。最近、対馬の方で積石塚の発掘調査をされた、ということで、我々もずっと伊豆諸島の調査をしてきたんですけども、対馬の方の状況と合わせて、伊豆の状況を見ると如何でしょうか。

俵 映像とか見ていますと、積石の状況とかですね、非常に良く似ているなあ、という気はします。私が調査した対馬の遺跡も、年代が良くわからなくてですね。ただ、対馬の場合は、やはり天道信仰というものがありまして、太陽の信仰にも関わるとか言われますが、それとの関連が言われるのであって。まあ、実際は、考古学的に発掘して調査をしたっていう事例は殆どなくて、今回初めて掘ったんですけども、結果としては遺物は出なかったんですが。やっぱり、文献とか、民俗儀礼以外にも、そういった考古学的調査によって事実を明らかにしていきながら、相互に比較していくっていうのが大事なんだな、と。

で、もう一つは、地域としては、対馬だけではなくて、壱岐とか、伊豆を比較検討して。地域的に離れていますから難しいところはあると思いますが、そういったことも進めていければなあ、と思っています。

深澤 ありがとうございます。突然のことで失礼を致しました。あの、やはり、天道信仰と積石といった問題で、研究の方針としては伊豆と同じような問題を抱えていて、考古学と宗教思想、これを車の両輪のように研究していかなければいけない、というのは同じだ、ということかと思っています。

で、本来であればですね、パネリストの先生方から最後に一言づつ、と思うんですが。いかにせん、時間

がございませんので、本当に一言だけ（笑）、お願いします。

中村 大場先生の神道考古学って、考古学・民俗学・神道史学の三位一体の考古学って言われているんですね。それで、大場先生は、それを古墳時代に適用したわけであって、ちょっと今の研究から見たら疑問の点もあるんですけども、今日の話、例えば中世の伊豆の話は、その研究方針でやっていける。そういう話を頂けたのは、非常に良かったな、と思っています。大場先生の研究っていうのは、それとして、新たに色々な方向へ拡大、展開していける、ということですね、今後研究していけばいいんじゃないか、というふうに思いました。ありがとうございました。

笹生 今日聞いていてですね、私自身の考え方について、また深く自信を持つことができました。何かと言うと、信仰と考古学を結び付ける要素としては、景観が非常に重要だということです。三橋先生のお話にもありましたけれども、この『三宅記』は、その場所の景観、村がどこにあり、どこに神社やお堂があるのか、島の形はどうか。それらの信仰的な意味付けをしているのが、この『三宅記』なんですね。その意味付けをしている景観が、どの時代に形成され、維持されているのか。例えば、先ほど内川先生が仰っていたように、12世紀から近現代まで同じような信仰が、ずっと繋がってくる。ですから、景観が維持されている時代に『三宅記』が作られているとすると、その景観が意味している信仰と、考古遺物が、具体的に、論理的に接続することができるようになってくる。思いつきや、異なる時代の資料で色々な信仰に関する遺物を解釈するのではなく、総合的に景観を復元して、その意味付けをしている神話体系、もしくは信仰というものを結び付けることによって、かなり合理的な信仰の復元ができるんだ、と。その素材が、まさにここにある、と今日は改めて認識することができました。どうも、ありがとうございました。

三橋 改めて、大場先生の偉大さを教えていただきました。とともに、先生と比べると、なんと自分は…あとは言いません（笑）。というのは、私の専門は考古学じゃありませんが、大場先生の講義を受けました。最初の講義の時、私は先生を掃除の方が黒板を拭きに來たのだと思ったんですね。作業服姿でしたので。恐らく発掘へ行く姿で來られたんですね。そのことがむしろ親しみを持つようになり、大場先生が大好きになりました。『熱海市史』の調査では、それは丁寧な御指導をいただきました。特に伊豆山神社の調査のことが思い出され、改めて大場先生って、こういう方だったんだっていうことを知り、感心し「自分も、もうちょっと長生きして頑張らなくちゃ」と思いました。本日は、このようなシンポジウムにお招きいただきありがとうございました。もう一度、初めから『三宅記』の勉強をし直さなければいけないと思いました。それにより、若い皆さまから沢山の元気をいただきましたことを、感謝いたします。

内川 伊豆諸島っていうのは、東方浄瑠璃世界であって、薬師の信仰が非常に篤い、というお話があったわけなんですけど、いわば日本における信仰の古層を、小窓の如く見せてくれている地域だ、と私は思っています。そういうふうに、薬師信仰が中核にあった地域であると同時に、これは日本中に、伊豆諸島に見られるような信仰があったわけであります。例えば、土地が利用されて、どんどん変化していく渋谷の100m圏内で、昭和50年代のものをみつけてこいと言われても、殆ど出てこない。ところが、私の住んでいる相模原辺りへ行くと、ちょっとは出てくる。もっと田舎へ行けば、ということだと思うんですね。ですから、そういう古層を見せている、いわば今日に繋がる信仰の貴重な情報が、島々にある。或いは、岐阜や長野の山の中にも、きっと同じような積石があったりする、ということなんですね。ですから、そういった情報を、我々も見過ごすことなくですね、今後また研究を進めていきたい、と。先ほどコメントを頂いた俵先生のお話にありました対馬は、やはり神祇官に出仕した同胞ですよ、伊豆や壱岐の人たちと。やはり、同じような積石があったりする。それは、絶対偶然のことではない、ということを見据えながら、広く考えていきたいと思っています。ありがとうございました。

深澤 どうもありがとうございました。さて、本日も、いらっしゃった皆さんと同様ですね、スタッフの皆さんにもお手伝いを頂きました。どうもありがとうございました。あの、冒頭の映像を編集してくれたのは、写真撮っている加藤元康さんですね。

それで、最後に三橋先生から、シャクジン、石神っていうのは、一つ大きなポイントになるんだ、とお話を頂きましたけれども、石井さん。最後に、石井匠さんからイベントの宣伝があります。今日の石神は、中世や近世の石神だったんですけれども、今度は縄文ということ。

石井 皆さん、もうお帰りになりたいところで申し訳ないんですが（笑）、先ほど三橋先生の方から、三宅島の御笏神社の御神体が石棒状のものではないか、という話もありましたが、それが縄文時代と関係あるかどうかはわかりませんが、『縄文人の石神－大形石棒にみる祭儀行為－』というタイトルで、10月9日に学術資料館のシンポジウムを行います。まあ、考古学的な議論が中心となりますが、ご興味、ご関心のある方は、是非ご来場頂ければと思います。今日はありがとうございます。

深澤 はい、どうもありがとうございました。それでは最後に、吉田恵二先生から総括を頂いて終わりにしたいと思います。宜しくお願い致します。

吉田 考古学研究室の吉田と申します。私、1980年にこちらの大学へ参りまして、81年から約30年近く三宅島へ通って調査をして、その間、色んな方にお世話になりました。それで、今日のお話もありましたし、実際に遺物も展示してあるので、おわかりになったと思うんですけど、基本的に6世紀、古墳時代ですね、洗田遺跡、或いは、三宅島の富賀様でもですね、基本的にどこにでもあるような遺物が出るんですね。要するに、ローカルなもの。ところが、大島の和泉浜C遺跡では、展示ケースの中でちょっと見にくいんですが、お茶碗の中にですね、綺麗な文様が入っているんです。まさに、私がこちらへ来る前に発掘をしておりました平城宮。そこから出てくるものと同じなんです。まさに、国家的な絡みがこの段階で出てくる。年代的に言いますと、ちょうど7世紀の第4四半期ですから、都では藤原京ですね。作られていた時代は。それからもう一つ。式根島の吹之江遺跡。私は、3年間通って発掘したんですが、あそこでもですね、完璧に都風のもので、お祭りをやっている。要するに、律令制度が出来るか出来ないか、その頃に、何故か伊豆の島々がクローズアップされる、というね、こういう現象がある。

それから、和泉浜C遺跡から出てきている遺物、まあ殆どがローカルなものなんですけど、その中にですね、金の延板が出ています。それから、銀の延板が出ています。で、上に孔が開いている。恐らく、糸か紐かなんかで括っていたんでしょう。見方を変えますと、孔の無いものは、日本で最初に作られた飛鳥寺という寺、その地下の心礎の周りに埋めてある。さらに、法隆寺の五重塔、あの柱の下、舍利容器と一緒に納めてある。そういう意味で言いますと、仏教との関係が非常に大きくなる。

それで、最後に一言だけ言いたいのはですね、考古学は、モノでお話します。但し、モノの中には、木とか竹とかですね、紙とか、或いは、布とか、腐ってしまうものがあるんですね。で、我々はよく「考古学、見てきたようなウソを言い」、という冗談を言いますが（笑）。実際に残っているものだけで勝負したらイカン、と。残っていないモノも使われていた筈だ、と。そうなりますと、平安時代のね、『延喜式』とかですね、様々な記録、それから現在ですね、色んな神社で行われている祭礼、こういったものを見ながら遡って考えていく。こういう必要があるんだろう、ということを感じました。以上です。

深澤 ありがとうございます。あの、皆様にはですね、最大予定時間を30分もオーバー致しまして、本当にお詫びを申し上げます。また、これに懲りずですね、國學院大学の企画にですね、ご来場頂けたらありがたいと思います。で、会場の椅子などを片付けている間、まだ開館しておりますので、暫くイブニングミュージアムをお楽しみ頂ければ、というふうに思います。パネリストの先生方も、本当に長時間ありがとうございました。拍手を頂けたらと思います。（拍手）ありがとうございます。暫くご観覧下さい。

※当日配布資料は割愛した。